

は し が き

本研究は、文部省科学研究費補助金の助成により、平成三、四年の2年間にわたり遂行されたものである。

われわれは、長い人生を生きていく上で、自分にはどのような能力があるのかを知り、その能力を活かすことで社会に貢献していきたいと願っている。

そのような意味において、能力の自己評価に関する研究は重要である。本研究は、まず第一に、現在の中学生、大学生が自分にとって重要なものとしてどのような特性や能力をあげるのかを明らかにする。次に、これらの特性や能力は、どのようなメカニズムを経ることで安定した自己評価を獲得し、自分自身の理想実現にむかうのかを検討することを試みる。

本研究の実施とまとめにあたってご協力をいただいた、上越教育大学大学院院生の内田 淳氏、中元昭広氏、学部生の京谷容子さん、その他多くの関係者のご協力をいただきましたことに厚くお礼を申し上げます。

平成5年3月

研究組織

研究代表者： 蘭 千壽（上越教育大学学校教育学部助教授）

研究経費

平成3年度	500千円
平成4年度	400千円
計	900千円

研究発表

(1) 口頭発表

- 蘭 千壽 能力の自己評価に関する実験的研究 (1)
日本心理学会第54回大会 1990年6月
- 蘭 千壽 能力の自己評価に関する実験的研究 (2)
日本心理学会第55回大会 1991年10月

(2) 出版物

- 蘭 千壽 対人感情と自己評価 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽（編著）
「セルフ・エスティームの心理学」 ナカニシヤ出版 1992年6月
78-88.
- 蘭 千壽 パフォーマンスと自己評価 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽（編著）
「セルフ・エスティームの心理学」 ナカニシヤ出版 1992年6月
89-96.
- 蘭 千壽 セルフ・エスティームの形成と学校の影響 遠藤辰雄・井上祥・
蘭千壽（編著）「セルフ・エスティームの心理学」 ナカニシヤ出版
1992年6月 178-199.

目 次

はしがき

第1章 能力の自己評価研究	1
第1節 自己評価とは	1
第2節 能力の自己評価に関する過去の研究	1
第2章 中学生、大学生の重視する自己特性と自他比較	6
第1節 研究目的	6
第2節 方法	7
第3節 結果と考察	8
第3章 自己評価の階層モデルに関する実験	15
第1節 自己評価の機能の類別	15
第2節 自己評価機能の階層性	17
第3節 本実験の仮説	18
第4節 方法	19
第5節 結果	23
第6節 考察	42
第7節 全体的考察	45
参考文献	49
資料	52

おわりに

第1章 能力の自己評価研究

第1節 自己評価とは

人は、日常生活において、「自分の短気なところが嫌いだ」とか「今回の試験は自分でもよく頑張ったと思う」といったように、自分自身の属性や行動について考え、自分がどのような人間であるのかについて思いを巡らすことがしばしばある。このように、「自分は～だ」という自己に関するさまざまな認知や、それを形成する行動や態度に対して、それが良いことなのか悪いことなのか、好ましいことなのか好ましくないことなのかという評価をおこなう。このような自己概念やその内容である自己の行動・態度に対する良し悪しや好悪の評価を自己評価 (self-evaluation) という。これは、他者との相互作用の中でおこなわれることが多く、また、そうした評価過程や結果に基づいて、人は自らの維持・強化・発展を図るのである。

Heider (1958) によると、人は、自分をとりまく環境に効果的に対処するため、その環境と自分の能力を評価するように動機づけられているとし、能力の自己評価の重要性を指摘している。すなわち、自己評価が曖昧で適切な能力の査定ができないと、その個人は自己の明確な位置づけができず、将来に対する方向づけも不可能となる。

このように、人が積極的な形で生きていくためには、何らかの形で自らを意味づけ、価値づける上で基準となる自己評価が重要となってくる。

第2節 能力の自己評価に関する過去の研究

能力の自己評価に関しては二つの異なる視点から多くの研究者によって、さまざまな理論が展開されてきた。一つは、他者との比較が自らの判断や評価の適切さに関する重要な枠組みを提供するとして、対他的文脈の中で自己評価の機能を扱ったものである。他の一つは、自己評価を自己の発達の一過程として重視し、自己の機能との関わりの中で評価機能を扱ったものである。

前者における代表的な理論としては、Festinger (1954) による社会的比較過程理論 (theory of social comparison processes) があげられる。

これは、「人には自らの意見や能力を評価しようとする動因があり、客観的・非社会的手段を用いられない場合は、類似した他者との比較によって正確で安定した評価を得ようとする」というものである。この基本的な考え方については Latane や Regan, Singerほか多くの研究者によって支持されるとともにさまざまな問題点も指摘されている（高田, 1971, 1974）。

社会的比較過程理論が認知的明瞭さを得ることを強調しているのに対し、Tesser (1982) は、個人がいかにかに自己評価をおこなうかでなく、それはなかば自明のこととして、個人がいかにかに自己評価を維持・高揚させようとするかに強調点をおいた自己評価維持モデル (self-evaluation maintenance model) を示している。この理論は社会的比較過程理論の一つの発展といえるものであり、他者との比較過程に加え、優れた他者の栄光に浴する反映過程を取り入れた点で注目すべきものがある。

また、対他的な文脈にありながら、他者との比較よりも個人的な評価欲求にウエイトをおいたものとして、自己査定理論 (self-assessment theory) と自己高揚理論 (self-enhancement theory) がある。前者によると、人は、環境にうまく対応するために能力の現実的な評価に関する情報を得るように動機づけられており、自尊感情 (self-esteem) と関係なく、その情報を最大にする方向で行動する、というものである。Trope (1983) は、課題選択の側面からこの理論を展開させている。それに対して、後者においては、人は、自己評価に際して、しばしば自尊感情を防衛したりあるいは高揚させたりする行動傾向がある (Brickman & Bulman, 1977) というものである。この二つの相反する理論について、Strubeら (1985) はその相対的な重要性について検討を加えている。

これらが、おもに対他的文脈の中での研究であるのに対して、Albert (1977) は、個人内の縦断的・時間的比較による継時的比較理論 (temporal comparison theory) を示し、自我同一性形成の一過程としての自己評価機能の重要性を指摘している。

それでは、以上の諸理論の中から、代表的なものとして①Festingerの社会的比較過程理論、②Tesserの自己評価維持モデル、③Tropeの自己査定理論、④Albertの継時的比較理論についてみていくことにする。なお、これらの理論については蘭 (1992) によって詳しく纏められている。

1. 社会的比較過程理論

人は、複雑な社会環境をよりよく理解し、それに効果的に対処しよう

と努める (Heider, 1958)。その際、他者が自らの判断や行動の適切さに関する重要な枠組みを提供する。とくに、類似した他者との比較は自己の明確な位置づけに有効である。このような社会的比較は自己に関する種の不確かさが存在する状況で生起する。

Festinger (1954) は、これらの基本的な考え方を前提とし、社会的比較過程理論を提唱した。この理論の基本仮説は次の三つである。

- ①人には、自らの意見や能力を評価しようとする動因がある。
- ②人は、客観的もしくは物理的手段が利用できない場合、他者の意見や能力との比較をおこなうことによって、自らの意見や能力を評価しようとする。
- ③他者と自らを比較しようとする傾向は、他者との意見や能力の差が増大するにつれて減少する。

しかしながら、能力評価の場合は必ず優劣・上下が伴うので、①自分より優れた者との比較、②自分より劣った者との比較の二過程が生じる。自分より優れた者との比較は、自分が優れた存在でありたいという向上性の動因 (unidirectional drive upward) によるもので、自分より優れた他者を凌いで自己の能力を向上させようとする。あるいは、それによって、自己の能力評価を上げようとするものである (Festinger, 1954)。これに対して、自尊感情に対する脅威のあるときには、自分より劣った者との比較も生じうる (Friend & Gilbert, 1973) とされている。

このように、能力評価においては、正確な評価機能をもつ社会的比較と自己高揚の機能をもつ社会的比較が存在することが指摘されている (Latane, 1966; 高田, 1974)。

2. 自己評価維持モデル

Tesserら (1982) によると、人は自己をポジティブに評価し、また他者が自己をポジティブに評価するように行動する傾向があるとの考え方に基づき、自己評価維持モデル (self-evaluation maintenance model: SEMモデル) を提唱した。これは、「人はポジティブな自己評価を最大限に維持し、それを増大させるように動機づけられる」を基本仮説としたものであり、相反する二つの評価過程、すなわち反映過程 (reflection process) と比較過程 (comparison process) によって概念化されている。反映過程とは、自分と心理的に親密な (closeness) 他者の優れたパフォーマンスの栄光に浴することによって自己評価を高めようとするもの (例えば、私の姉はピアノが上手なのでピアニストになれるか

もしれない、など)である。これに対して、比較過程とは心理的に親密な他者のパフォーマンスと自己のそれとを比較するものである。

これら二過程のうちいずれが生起するかは、他者のパフォーマンス (performance) がその個人の自己定義にどの程度関連している (relevance) かによって決定される。すなわち、関連性が低ければ反映過程により自己評価は高められる。逆に関連性が高ければ比較過程が作用し、そこでの自己のパフォーマンスが他者のそれよりも優れている場合には自己評価が高まり、劣っている場合には自己評価が低められる。そこで、自己評価を維持するために、他者との心理的な親密さ (closeness)、自他の相対的なパフォーマンス (performance)、関連性 (relevance) をこれらの状況に応じて認知的・行動的に変えていくのである。

この SEMモデルは、比較過程のほかに反映過程という概念をとり入れた点では社会的比較過程理論の一つの発展といえる。また、これまで概念的に扱われてきた自己評価のダイナミックスを三変数 (親密さ・パフォーマンス・関連性) と二過程 (反映過程・比較過程) によってモデル化した点において非常に画期的な理論であるといえる。

3. 自己査定理論

Trope (1983) は、達成行動を自己の能力についての情報収集手段とみなし、自己評価の意味を明確に捉えた自己査定理論 (self-assessment theory) を示した。

ここでの基本的仮定は、人は、自己の能力の不確かさを低減させる (正確な自己知識を得る) ことを重要視する。それゆえ、成功・失敗の可能性に関係なく、自己の能力レベルについての不確かさがどの程度除去されるかによって課題選択がなされる、というものである。

Trope (1979) は、課題の能力判別度について大きく次の四つに類型化している。

- ①課題「A」：高低いずれの能力についても判別度の低い課題。
- ②課題「B」：高能力については判別度は高いが、低能力については判別度が低い課題。
- ③課題「C」：高能力についての判別度は低いが、低能力については判別度が高い課題。
- ④課題「D」：高低いずれの能力についても判別度の高い課題、である。

自己査定理論においては、自己の能力レベルについての判別性が高いほどその課題は好まれる。それゆえ、これらの課題の魅力度は $A < B \approx$

C<Dとなるのである。

これは、人は、自己評価に際して、自尊感情を防衛あるいは高揚させる行動傾向がある、という自己高揚理論 (self-enhancement theory) と相対するものである。しかしながら、Tropeは、その相対的な価値づけについても言及し、自己査定は長期的な意味での自己高揚のためにも必要であるとしている。

4. 継時的比較理論

ある時点における自他の比較、いわば個人間の横断的な比較を論じているのが社会的比較過程理論であるといえるが、この考え方を個人内の縦断的・時系列的な比較の問題にそのまま置き換えて、Albert (1979) は継時的比較理論 (temporal comparison theory) を示した。

われわれの自己概念は他者との関係において規定される一方、それが明確化されるためには時間を越えた自己同一性もまた必要とされる。それゆえこの自己同一性形成のためにも、現在の自分のもつ諸属性と過去・将来におけるそれとの比較がなされるのである。

これについて、Albertは、Festinger (1954) の三つの基本的仮定を縦断的に翻訳し次のような仮説を提示している。

- ①人には、時間的変動を越えた自己同一性の意識を明確に評価しようとする動因がある。
- ②そのとき、客観的証拠が得られなければ、過去における自己概念と現在のそれを比較することにより、自己同一性を明らかにしようとする。
- ③その傾向は現在の自己概念と過去のそれとの差が増すにつれて減少する。

これらの考え方は概念操作によって導き出されたものであり、いまだその実証が得られているわけではないが、比較過程と自己の機能との関わりに興味深い示唆を与えるものといえよう。

第2章 中学生、大学生の重視する自己特性と自他比較

第1節 研究目的

われわれは、自分自身にとって重要なものとして、どのような特性や能力をあげるのであろうか。もちろん、われわれが社会生活を営んでいくにあたって、自分自身の価値観や理想に根ざしながら自分の適性としての能力を見だし、その能力を使いこなし発揮していくことで社会への貢献と自分自身の満足感を得ることになる。この場合、そのような能力は多くの人々の協力によって発現されることはいうまでもないことである。したがって、自我発見の時代ともいわれる青年期の中学生、大学生が将来的な職業選択と密接に関連する自分自身の能力についてどのように位置づけているのかを探っていくことにする。

第1の目的として、中学生、大学生が自分にとって重要なものとしてどのような能力や特性、態度などをあげるのかを明らかにする。また、これらの重視する自己特性は自尊感情の高低によって違いがみられるかについても言及する。これによって、自己把握による能力が彼ら自身のなかにどう位置づけられるのかをみることができる。

第2の目的として、中学生、大学生における重視する自己特性はどのような理由に基づいているのだろうか。Schoneman (1981)、Mettee & Smith (1977)を参照にして、(a) 自分がそうであることは自分の理想であるから(理想自己)、(b) 自分がそうであることは社会的価値の1つであり望ましいから(社会的望ましさ)、(c) 自分なりの理想の水準や過去の自分と比べて、それをできるようになったからあるいはまだできていないから(自己観察)、(d) 他の人がわたしに直接的・間接的に言ってくれることや、わたしに示す反応を通して自分が優れているまたは劣っているから(他者からのフィードバック)、(e) 自分の行為や意見を他の人と比べて、自分の方が優れているまたは劣っているから(他者との社会的比較)、の5つの選択肢の中から複数を選択回答させることにする。

第3の目的として、自分が重視する自己特性は友人やそうでない人のそれとの比較において、どのような心理機制がはたらくのかを自己評価維持モデル(SEM;self-evaluation maintenance)の観点から検討する。

第1章でみたように、Tesser (1980, 1984a) の SEM (self-evaluation maintenance) モデルは、児童や小中学生の友人選択においても高い妥当性を有することが示されている。Tesser, Campbell, & Smith (1984) や、磯崎・高橋 (1988) は、小学生・中学生において、SEM モデルの予想する友人選択がおこなわれていることを検証している。

本章では、青年前期と後期に位置する中学生、大学生を対象として、彼らの友人選択におけるこのモデルの妥当性を検討しようとするものである。手続きは2つの先行研究とほぼ同様であるが、高木 (1991, 1992)

と同じく関与度については少し異なった手法を用いた。それというのは、今回の対象は13, 14才および20才前後の青年であり、彼らが自己にとって重要であると考えた次元を、実験者が予め用意したレパートリーの中から選択させるのは、不自然かつ不可能であると考えられるからである。過去に関与度を独立変数として操作した実験は多いが、その多くは実験者が予め用意したレパートリーの中から被験者にとって重要なもの、重要でないものを選択させるという方法がとられている。それらは、学校の科目や何らかのテストが大半であり、広い意味での人の能力的な側面に関わるものがほとんどである。

しかし、われわれが、日頃、「この点だけは自分にとって大事であり誰にも負けたくない」と思っていることは実にさまざまであることは想像に難くない。そしてその多様性は、年齢とともに増大することが予想される。そこで本研究では、関与度の高い次元について、全く自由に被験者にあげさせることとする。仮に、能力以外の次元をあげるものが無視できない程度に存在するならば、従来主として能力的な次元について検証されてきたこのモデルが、それ以外の次元においても妥当性を有するかどうか検証することが不可欠となるであろう。次元の特性によってモデルの妥当性がどのように異なるかについて検討を加えることが可能である。

第2節 方法

1 被験者

被験者は、大学生が男女合わせて123名であり、中学生が男女合わせて133名であった。

2 手続き

調査は、次のような手続きに沿って、集団形式で質問紙により実施した。

(1) 被験者はまず、「これだけは自分にとって大事であり、誰にも負けたくないと思うもの」を2つあげさせた。

(2) 次に、重視する自己特性についてそれぞれ次の5つの観点から、それらの理由について1つまたは複数回答させた。

(a) 自分がそうであることは自分の理想であるから（理想自己）

(b) 自分がそうであることは社会的価値の1つであり望ましいから（社会的望ましさ）

(c) 自分なりの理想の水準や過去の自分と比べて、それをできるようになったから、あるいはまだできていないから（自己観察）

(d) 他の人がわたしに直接的・間接的に言ってくれることや、わたしに示す反応を通して自分が優れているから、または劣っているから（他者からのフィードバック）

(e) 自分の行為や意見を他の人と比べて、自分の方が優れているから、または劣っているから（他者との社会的比較）、であった。

(3) さらに、これらの重視する自己特性につき自己比較をおこなわせるために、「親友・もしくはそれに近いと思われる同性・同年代の友人、あるいは一緒にいることが楽しい友人」（心理的に近い他者）を1名、「特に好意をもっているわけではない同性・同年代の知人、あるいは一緒にいることが楽しくない知人」（心理的に遠い他者）を1名思い浮かべ、そのイニシャルを記入する。続いて、自分があげた関与度の高いことにおける、自分対心理的に近い他者（またはそうでない人）の優劣を判定する。判定は、「自分の方が優れている」、「相手の方が優れている」、あるいは「同程度である」の3件法でおこなわれた。

(4) 最後に、自尊感情の質問紙（Rosenberg, 1965）測定が6段階尺度によっておこなわれた。

第3節 結果と考察

1 中学生、大学生の重視する自己特性

表2-1 に示されているように、中学生において重視する自己特性は、能力（学力・運動能力・芸術的能力など）が66.5%と最も多く、ついで態度・意見（何事にも根気づよい・柔軟な態度をもつ・冷静であるなど）が13.5%であり、あと性格・行動（8.7%）、生き方（8.3%）、道徳

性 (3.0%) であった。

一方、大学生が重視する自己特性は、性格・行動 (明朗さ・配慮できる・積極性・社交性など) が32.5%と最も多く、ついで能力 (問題解決能力・運動能力・思考力・判断力など) が27.2%であり、以下態度・意見 (16.1%)、生き方 (15.6%)、道徳性 (8.6%) であった。

中学生では重視する自己特性として能力をあげるものが圧倒的であるといえる。この時期になると、自分には何ができ、それはどの程度のものなのかを把握することで自分自身の諸能力・特性を診断していると考えられる。

これに対して、大学生では性格・行動と能力を自己特性として重視していた。このことは、この調査の対象者が教員養成学部の学生であり、将来的な職業志望が明確な人々であることである。彼らにとって、他の人との関係を円滑にやっていくことは、教員となるにあたって重要なことと位置づけられていることによろう。能力は第2位としてあげられ、その内容としては問題解決能力、思考力、判断力をあげていた。

表2-2、表2-3は、折半法による自尊感情の高低別の中学生、大学生の重視する自己特性の出現度数が示されている。これらの結果は、さきの表2-1のそれととくに変化がみられず、自尊感情による影響はみられないといえよう。

2 重視する自己特性の選択理由

中学生、大学生の重視する自己特性の選択理由は、表2-4にまとめられている。それによると、まず中学生においては、全体としては (a)理想自己が最も多く、ついで (c)自己観察、(d)他者からのフィードバック、(e)他者との社会的比較、(b)社会的望ましさの順であった。

この結果をみると、重視する自己特性について自分なりの視点から理由づけをしていることがわかる。次に、最も重視した能力についての理由も同じ選択理由のパターンがみられた。このことに関しても、中学生は自分自身の能力適性の判断においても、対人関係の深まりについてもそれほど分化していないと考えられるが、理想や自己観察の選択理由にみられるように自分なりの視点から重視していると考察される。また、他者からのアドバイスやフィードバック、他者との比較などの選択理由が高いことから、他者からのフィードバックも能力重視の理由としていと考察される。

大学生に関しては、全体として、(a)理想自己が最も多く、ついで(c)

自己観察が多く、(e)他者との社会的比較、(d)他者からのフィードバック、(b)社会的望ましさの順に少なかった。この大学生においては、どの種の職業（教職志望）につくのがほとんど明確であり、あとは入職にあたっての主要な力量をどう養成するのが重要な課題となっている状況にある。このことから、彼らは重視する自己特性を自分自身の理想とみなしており、それはさらに自己観察に基づいて自己特性を見定めていたことによると考えられる。

次に、最も重視した性格・行動特性と能力に関する理由についても同じ選択理由のパターンがみられた。このことについても、全体傾向と同じように考察することができよう。

このように、中学生、大学生に関しては、全体的には同じ選択理由のパターンがみられるが、大学生においては重視する自己特性をとくに自分の理想とみなしていることに特徴があるといえよう。ただし、表2-4にみられるように、中学生、大学生とともに自尊感情の違いによる異なった結果はみられなかった。

3 重視する自己特性別の自他比較

被験者が「これだけは自分にとって大事であり誰にも負けたくないと思うこと」としてあげた次元を分類した。分類に際しては、大学院学生5名が検討し、5つのカテゴリーに分類した。これらにつき、自他比較の結果が表2-5、6にまとめられている。

中学生に関する全体傾向をみると、自尊感情の高低にかかわらず、友人との自他比較においてはSEMモデルが成立せず、むしろ友人でない人との自他比較においてはSEMモデルの妥当性の高いことが明らかになった。このことは、友人ほど心理的に近い関係にあり、優劣判定を保留しているという特徴がみられた。これに対して心理的に遠い関係にある人々とは、自分の方を優位に判定するという特徴がみられた。つぎに、重視する自己特性別にみると、能力については全体傾向と同じパターンがみられる。ほかの特性についても同じ傾向がみられた。

大学生に関する全体的傾向をみると、自尊感情の高低にかかわらず、友人との自他比較においてはさらにSEMモデルが成立せず、友人でない人との自他比較においてもSEMモデルの妥当性の低いことが明らかになった。このことは、大学生においては重視する自己特性を自分の理想としており、それは他の人との比較ではなく、むしろ自分自身の理想や過去のそれとの比較が意味をもつことによると考えられる。したがって、

SEMモデルが成立しなかったと考察される。重視する自己特性別にみても、性格・行動や能力についても、他の特性に関してもさきの傾向と同じくSEMモデルが成立しなかったと考えられる。

このように、これらの結果は中学生においては友人でない人との比較においてSEMモデルの妥当性が高かったが、本来SEMモデルで仮定されていた友人との比較ではこのモデルの予測は成立しなかった。とくに大学生においては自他比較よりも自己の理想との比較が大きな意味をもつものといえよう。

表2-1 中学生、大学生の重視する自己特性

項目	(A)能力	(B)性格・行動	(C)道徳性	(D)生き方	(E)態度・意見	全体
中学生 (133)	177 (66.5%)	23 (8.7%)	8 (3.0%)	22 (8.3%)	36 (13.5%)	266 (100%)
大学生 (123)	66 (27.2%)	79 (32.5%)	21 (8.6%)	38 (15.6%)	39 (16.1%)	243 (100%)

表2-2 中学生の自尊感情群ごとの重視する自己特性

項目 自尊感情	(A)能力	(B)性格・行動	(C)道徳性	(D)生き方	(E)態度・意見	全体
高群 (62)	99	13	4	9	19	144
低群 (61)	78	10	4	13	17	122

表2-3 大学生の自尊感情群ごとの重視する自己特性

項目 自尊感情	(A)能力	(B)性格・行動	(C)道徳性	(D)生き方	(E)態度・意見	全体
高群 (62)	27	34	13	24	25	124
低群 (61)	39	45	8	14	14	122

表2-4 中学生、大学生における重視する自己特性別の選択理由

項目	能力					性格・行動					道徳性					生き方					態度・意見					全体					
	a	b	c	d	e	a	b	c	d	e	a	b	c	d	e	a	b	c	d	e	a	b	c	d	e	a	b	c	d	e	
自尊感情	40	9	41	29	25	4	1	10	2	4	10	1	11	3	5	4	1	4	0	2	3	2	0	0	0	61	14	66	34	36	
	30	8	24	28	18	7	3	1	2	3	10	1	9	3	3	7	1	6	2	1	1	0	3	1	3	55	13	43	36	28	
中学生	70	17	65	57	43	11	4	11	4	7	20	2	20	6	8	11	2	10	2	3	4	2	3	1	3	27				70	64
	19	1	13	6	9	20	6	12	11	8	4	7	7	5	5	20	4	10	4	6	11	2	5	3	2	90	17	47	31	30	
大学生	26	6	18	5	10	28	8	21	12	11	9	0	5	2	4	11	1	8	3	1	6	0	3	0	4	80	15	55	22	30	
	45	7	31	11	19	48	14	33	23	19	29	4	12	9	9	31	5	18	7	7	17	2	8	3	6	32				53	60

注) a) 理想自己、b) 社会的望ましさ、c) 自己観察、d) 他者からのフィードバック、e) 他者との社会的比較

表2-5 中学生における重視する自己特性別の自他比較

項目	能力			性格・行動			道徳性			生き方			態度・意見			全体			
	+	0	-	+	0	-	+	0	-	+	0	-	+	0	-	+	0	-	
高 群	友人	44	48	7	2	11	0	3	0	1	2	5	2	7	10	2	58	74	12
	ない	79	19	1	10	3	0	4	0	0	5	2	2	4	3	2		27	5
低 群	友人	29	32	7	5	4	0	1	2	1	4	7	1	5	11	1	44	56	10
	ない	65	15	8	7	2	0	1	1	2	5	6	2	12	4	1	90	28	13

表2-6 大学生における重視する自己特性別の自他比較

項目	能力			性格・行動			道徳性			生き方			態度・意見			全体			
	+	0	-	+	0	-	+	0	-	+	0	-	+	0	-	+	0	-	
高 群	友人	11	10	6	10	14	10	2	8	3	2	15	7	5	13	7	30	60	33
	ない	14	10	3	18	12	3	5	6	0	13	9	2	9	9	6	59	46	14
低 群	友人	9	19	11	10	16	19	0	6	2	0	8	6	3	5	6	22	54	44
	ない	17	12	8	15	16	12	4	3	1	5	7	1	6	7	1	47	45	23

第3章 自己評価の階層モデルに関する実験

第1節 自己評価の機能の類別

自己評価過程における諸評価の機能を明らかにするために、前述した理論を中心にいくつかの研究についてそれぞれがどのような評価欲求あるいは評価の機能を扱ったものであるかを検討する。

Festinger は、社会的比較過程の理論において、比較行動が生起するのは自己および自己のおかれた環境についての知識を明確にしたいという欲求であるとして、正確な評価機能の側面をとりあげている。しかしながら、これは評価基準によって二つに大別される。一つは、客観的・物理的手段が存在する場合、この手段が用いられ評価基準とされる。

他方、客観的・物理的手段が存在しない場合、類似する他者との比較によるパフォーマンスの優劣が評価基準とされる。ここでは、自分の能力を他者との相対的な位置づけによって明確にしたいという自己査定的な評価欲求が強く作用していると考えられる。

ところで、社会的比較の欲求には、正確な自己評価への欲求だけでなく、自己を高め自らを好ましいものとして認知したいという自己高揚への欲求も含んでいる (Latane, 1966)。比較対象が自分にとってポジティブなものであり、高得点を得ることに強く動機づけられている場合、自己より上位者への同一視によって自己高揚させようとする (Wheeler, 1966) が、ネガティブな対象である場合、最も劣った者との比較による優越感によって自己を高揚させようとする (Hakmillar, 1966) ことが明らかにされている。これは、Tesserの SEMモデルの反映過程、比較過程における評価のはたらきにそれぞれ対応すると考えられる。

さらに、Latane (1966)、高田 (1976) らは、社会的比較過程には性質の異なる二つの機能、すなわち、自己の位置づけを明らかにしようとする情報的比較と、自己を価値的に高めようとする規範的比較の両機能が含まれているとした。そして規範的比較には自己の絶対的な価値を高めようとする積極的な自己高揚と、相対的な価値を維持しようとする自己防衛的な自己高揚の両機能が含まれているとした。

これら社会的比較過程の理論に含まれる高揚的評価と正確な評価の機能のうちそれぞれ一方のみを強調したのが、TesserとTropeである。すなわち、Tesser がSEMモデルで論じているのは、自己評価維持という防

衛的な自己高揚的評価機能であり、心理的に近い他者（類似する他者）が評価基準として重要な役割を果たしている。

それに対して、Trope は、他者比較によらないで個人の絶対評価に基づいて正確な能力評価をおこなおうとする自己査定的評価機能について論究し、それにとって有効な情報をすべて評価基準として認めている。また、Albert (1977) の継時的比較理論からは、過去の自分を評価基準とした個人内で作用する継時的な評価機能の存在が指摘される。

これらのことを統括すると、自己評価欲求やそれによつてはたらく自己評価の機能には三種類あり、自己評価の方法には四種類あるといえる。

すなわち、自己評価の機能には、

- A. 正確に自己を把握する機能（正確な自己評価機能）
- B. 自己評価維持欲求による自己価値を防衛する機能（自己防衛的機能）
- C. 向上性動因による自己価値を高揚させる機能（自己高揚的機能）

がある。また、自己評価の方法には、

- ①物理的基準による（絶対）評価、
- ②他者比較による相対評価、
- ③正確に自己を把握する絶対評価、
- ④継時的比較による自己内の相対評価、がある。

これらの評価の方法によると、物理的基準による（絶対）評価とは、例えば、自分は 100m を何秒で走ることができるかといった、おもに課題についての客観的・物理的情報に基づきその課題に対する能力の絶対的なレベルを把握しようとする評価である。他者比較による相対評価とは、自己と類似するあるいは必ずしも類似しない他者、さらに心理的に近いまたは遠い他者との比較によって能力の相対的なレベルを明らかにしようとする評価である。正確に自己を把握する絶対評価とは、自己の相対的なレベルを明確にし、より確信度の高い絶対評価をおこなおうとする評価である。そして、継時的比較による自己内の相対評価とは、正負の理想の能力あるいは過去におけるそれとの比較を通して、現在の能力の相対的なレベルを明らかにしようとする評価である。

これらの方法には階層性がある。そして、それぞれの方法において各機能を得ることができる。例えば、他者との比較による相対評価をおこなう際、比較対象の選択によっては自己を正確にも、防衛的にも、高揚的にも把握できる。また、他者との比較によらない絶対評価をおこなう際にも、その方法（例えば、課題選択）によっては、自己を正確にも、防衛的にも、高揚的にも把握できるのである。

第2節 自己評価機能の階層性

1. 自己評価の機能の階層性の存在

それでは、これらの評価の機能はまったく独立したものであろうか。また、それらを規定するものは何であろうか。

人は、日常生活の中で無意識のうちに自己評価をおこなっていることが多い。例えば、あるテストの成績について、友人よりも悪いが前回よりは点数が上がったのでよしとするとか、逆に、前回よりも悪かったが、友人よりも良かったのでよしとする、などの評価をする。この場合、どちらの機能が優位であるかは別としても、自己高揚的评价と正確な自己評価のはたらきが同時に作用しているといえる。

また、ある新奇の課題が与えられると、まず、自分の能力レベルを知りたいという欲求がはたらく。次にはその能力レベルが社会的にどの程度価値のあるものなのかを知るために、他者との比較をおこなうようになり、それとともに自己の能力を高く認知したいという欲求も強くはたらくようになる。しかしながら、自他の相対的なレベルが確定してくると、他者との比較は能力評価にあまり意味をなさなくなり、今度は以前の自分と比べてどうなったのかの評価をおこなうことによって、自己の能力レベルの確信度をより高いものにしようとする。このようなことは、われわれが日常生活の中でよく経験することである。

このように、それぞれの機能には階層性があり、その出現の仕方には順序がある。Festingerによると、類似他者との比較によって正確な自己評価を得たのち、向上性の動因と防衛の欲求によって上位または下位の他者との比較をおこなうとしている。また、光富・狩野(1976)によると、社会的比較行動に導く欲求は、自己評価欲求、自己高揚欲求、そして影響欲求の経緯で作用する。これらの比較行動の変化は、彼らによると、自己評価の安定性によってもたらされる。したがって、上記の3つの自己評価の機能の出現は、自己評価の安定性に規定されるといえるであろう。しかしながら、Festingerの理論における類似他者との比較がおこなわれ、次に上位、下位の他者との比較がおこなわれるという時間的経緯は、非常に短いものであろう。すなわち、この比較行動の変化をもたらししているものは、「自己評価の安定性」ではなく、むしろ「自己評価の明確さ」であり、その後、さらに自己評価が「安定」することによって、自己受容がなされるようになり、自己防衛的评价はなされなくなるのではないかと考えられる。したがって、上記の評価の機能の出

現順序は、まず、自己評価の明確さの段階があり、次いで安定性の段階があると仮定される。そして、自己評価の明確さの段階では、正確な自己評価のはたらきがあり、次いで自己防衛的あるいは自己高揚的評価のはたらきがある。そしてさらに、自己評価の安定性の段階を迎えると、自分の理想や過去の能力との関連で現実のそれを把握する正確な自己評価のはたらきがなされ、次いで自己高揚的評価のはたらきがなされると仮定される。

第3節 本実験の仮説

このような知見に基づき、能力の自己評価に関して、以下のような仮説を導いた。

自己評価機能の出現順序は、まず、自己評価の明確さの段階があり、次いで安定性の段階があると仮定される。そして、自己評価の明確さの段階では、正確な自己評価のはたらきがあり、次いで自己防衛的あるいは自己高揚的評価のはたらきがある。そしてさらに、自己評価の安定性の段階を迎えると、自分の理想や過去の能力との関連で現実のそれを把握する正確な自己評価のはたらきがなされ、次いで自己高揚的評価のはたらきがなされると仮定される。

本仮説に基づき、課題と自己定義との関連性、比較他者との心理的な親密さ、比較対象・課題の選択等の側面から、課題に対する能力の評価基準の明確さや能力の自己評価の安定さの段階によって自己防衛的あるいは自己高揚的な評価機能と正確な自己評価機能のいずれが優位にはたらくのかについて検討する。さらに、本仮説から以下の下位仮説が導かれる。

①能力についての評価が不安定なときには、自己防衛的あるいは自己高揚的な評価機能が優位にはたらくため、関連性のすべての次元と比較他者との心理的な親密さを変化させるであろう。すなわち、自己優位のときにはこれらを高め、自己劣位のときにはこれらを低めるであろう。また、達成行動においては、自己防衛的あるいは自己高揚的になり、自己評価を最大に防衛・高揚する方向での比較対象や課題の選択がなされるであろう。

②能力についての評価が安定しているときには、正確な自己評価機能が優位にはたらくため、自己概念と直接的に結びつく高次元の関連性や親密さの変化は少ないであろう。また、達成行動においては、向上指向

が強くなり、比較対象や課題についても、自己の正確な能力評価が可能で、自己の能力を高める方向での自己高揚的選択がなされるであろう。

第4節 方法

1 被験者

J大学の友人同士である学生2名を1組として30組、計60名（男子12名、女子48名）。4実験条件の各々に15名ずつが充当された。

2 実験条件

自己防衛的あるいは自己高揚的な評価機能と正確な自己評価機能のいずれが優位となるかは、個人の評価基準の明確さや能力の自己評価の安定さの段階によるところが大きいと思われる。

例えば、ある課題について、そのパフォーマンス結果の変動が大きいと自己の能力レベルを査定しにくいし、たとえ正確なパフォーマンス結果を知ることができたとしても、他者との相対的なレベルが明らかにされなければ、その結果には社会的リアリティが付与されず、自己評価への不明確さが存在することになる。このような不明確さの除去のためには社会的比較情報が有効であり (Festinger, 1954)、特に課題については経験や情報が欠如する等、その不明確さが大きい状況では、モデルの存在が大きく影響する (高田・高田, 1976)。

以上の知見に基づき、今回の実験では、課題について自他のパフォーマンスを比較する場面を設定し、その相対的な優劣の一貫性によって評価基準の安定性を操作した。設定された実験条件は以下の4つである。

<安定群>

C₁ 条件：すべての課題で、成績が一貫して友人よりも良いと評価される。

C₂ 条件：すべての課題で、成績が一貫して友人よりも悪いと評価される。

<不安定群>

C₃ 条件：1回目の成績が友人よりも良く、2回目が友人よりも悪いという評価が課題ごとに繰り返される。

C₄ 条件：1回目の成績が友人よりも悪く、2回目が友人よりも良いという評価が課題ごとに繰り返される。

3 課題

実験操作のために、思考の柔軟性を測るものであると教示した3種類の課題を実施した。第1課題は、4文字のひらがなから成るアナグラム課題、第2課題はひらがな10文字から3文字を選び出して言葉を作るアナグラム課題、第3課題は、6つの数字から成る数列課題であった。これらは、被験者に能力測定の意識を喚起させやすいことと、条件ごとに問題の難易度を操作しやすいことの2つの理由から選ばれたものである。いずれの課題も1試行90秒、3試行を1セッションとし、2セッションずつおこなわれた。

4 独立変数の操作

独立変数である自・他の成績得点が3試行分の平均得点として次のように操作された。良いパフォーマンスの被験者においては、第1・3課題で30問中20問前後、第2課題で75%前後の正当率を得、悪いパフォーマンスの被験者においては、第1・3課題で30問中12問前後、第2課題で55%前後の正答率を得るように操作された。その際、パフォーマンス結果にリアリティをもたせるため、課題の難易度操作がおこなわれ、被験者本人の実際の得点がフィードバックされた。

5 従属変数

従属変数として、以下の5つを検定した。

(1) 関連性評定

自己評価は、自己の発達過程において自己概念の次の段階に生じるものであり、形成された自己概念に対する評価であるとされる。それゆえ、梶田(1980、1985)による自己概念の重層的構成要素に対応させるかたちで、関連性を以下の5つの次元；①課題に対する興味・関心、②自己のパフォーマンス結果に対する評価、③それに対する満足度、④課題の妥当性評価、⑤自己定義にとっての重要性、から構成した。そして各々の次元について2つの質問項目を対応作成し、7段階尺度(全くそうである(7)-全くそうでない(1))で評定させた。

(2) 親密さ評定

比較対象となる友人との心理的な親密さを測定するため、藤森(1980)の親密、交友、承認、共同の4次元から成る対人評定尺度に競争の次元を加えた5次元について、各々2項目ずつ、計10項目について、7段階

尺度で評定させた。

(3) 比較対象としての友人に対する認知評定

比較対象としての友人に対する認知が課題遂行によってどのように変化するかを検討するため、以下の4次元；①友人のパフォーマンスに対する関心度、②協同相手としての認知、③競争相手としての認知について、それぞれ7段階尺度で評定させた。

(4) 比較対象の選択

評価の安定性の違いによって、達成行動における積極性にどのような違いがみられるかを検討するために、同じ課題を遂行したものとして、A（最高得点者）、B（悪い評価を受けた被験者と同程度の得点者）、C（良い評価を受けた被験者と同程度の得点者）、D（最低得点者）の4人の得点を呈示し、協同相手、競争相手として誰を選びたいかを選択させた。

(5) 課題選択

比較対象の選択と同様の目的で課題の選択をおこなわせた。Trope（1979）の能力水準の判別性による課題類型にしたがい、次の4つの課題を設定し、次にどの課題をおこないたいかを選択させた。

- A：高低いずれの能力についても判別度の低い課題（3文字のアナグラム）
- B：高能力について判別度は高いが、低能力については判別度が低い課題（難しい4文字のアナグラム）
- C：高能力について判別度は低いが、低能力については判別度が高い課題（簡単な4文字のアナグラム）
- D：高低いずれの能力についても判別度の高い課題（5文字のアナグラム）

6 手続き

①被験者に、「これは、教師の適性のひとつである思考の柔軟性が対人認知に及ぼす影響を調べるための実験である。」と教示し、②自己評価基準の明確さの段階を操作するため、一つの課題について2セッションずつ、計6セッションの課題をおこなわせ、③各セッション終了ごとに成績のフィードバックがおこなわれた。その後、④課題と自己定義との関連性、友人との心理的な親密さ、比較対象としての友人の認知、達成行動における比較対象や課題の選択等の項目を含む質問紙に回答が求められ、事前に回答させたそれとあわせて7回の回答における変化がみ

られた。その際、同じ項目内容で表現の異なる3種類の質問紙を作成して順番に7回使用したため、表現方法の相違による効果を消す上で、使用順序を被験者ごとに変えるよう配慮した。実験は、少なくとも1日の間隔をおき、3回に分けて実施された。具体的な手続きは以下のとおりである。

<第1回目>

被験者は、相互作用を防ぐため、ついたての立てられたブースに離れて入れられ、まず、自尊感情を測定するための質問紙と事前質問紙への回答が求められた。その後、2セッション分の問題冊子が配布され、次のような教示がおこなわれた。

- ①このアナグラム課題は思考の柔軟性を測定するものとして妥当性があること。
- ②配列の変えられた清音4文字のひらがなを正しい順序に並べ変えて意味のおおる単語をつくる課題であること。
- ③実験者の合図にしたがい、1枚の問題用紙(30問)を90秒でおこなうこと。
- ④得点は3枚分の平均値として呈示されること。

そして、数問の練習問題をおこなった後、1セッションの実験課題がおこなわれた。課題遂行後、問題用紙を回収、採点がおこなわれ、モニターをとおして被験者に得点がフィードバックされた。得点の呈示に際しては、友人との比較がおこなわれやすいように、被験者2人の得点が並べて呈示された。その後、1回目の事後質問紙(事前質問紙と内容は同じだが、表現が一部変えられたもの)への回答が求められた。引続き第2セッションがおこなわれ、同様に2回目の事後質問紙に回答が求められた。ここで被験者には、この実験がすべて終了するまで、友人とのこの実験に関する会話をおこなわないように要請された。

<第2回目>

以下の点を除いて第1回目とはほぼ同じ手続きでおこなわれた。すなわち、用いられた実験課題が五十音字から無作意に選ばれた10文字のひらがなから3文字を選び出して有意味単語を作成するものであり、得点は正答率(%)で呈示されること、の2点である。さらに、この課題に関しては、機械的な組み合わせがなされることによってその妥当性が減じられる危具があったので、そのような傾向が認められた場合は大幅に減点する、との注意が加えられた。

<第3回目>

実験課題に、数学的な思考の柔軟性を測定すると称した、数並べ的な要素を多く含む数列課題を用いたことのほかは、前回までと同じ手続きが用いられた。すべての課題および質問紙への回答終了後、実験を通しての心理的な変化や評価基準をどのように設けたか等についての内省報告をおこなわせた。その後、本当の研究目的と、謝辞を述べ、了承を求めた後実験を終了した。

第5節 結果

1 実験操作の有効性

パフォーマンスの優劣による評価の安定性の操作が有効であったか否かをみるために、6枚の事後質問紙から、関連性評定のうち「自己のパフォーマンスに対する評価」次元(図3-2,3 参照)のみを抽出し、各々の実験群ごとに実験条件(2)×試行回数(6)の分散分析がおこなわれた。その結果、安定群である $C_1 \cdot C_2$ 条件では、試行回数の主効果と実験条件×試行回数の交互作用は認められなかったが、実験条件の主効果に有意差がみられた($F(1, 28) = 54.63, P < 0.1$)。これにつき単純効果の検定をおこなったところ、6回の全試行で条件間に有意差($P < 0.01$)が認められた。これらのことから、 C_1 条件の方が C_2 条件に比べて、自己のパフォーマンスを有意に高く評価していたといえる。また、 $C_1 \cdot C_2$ 条件ともその評価が安定していた。

不安定群である $C_3 \cdot C_4$ 条件においても同様の分析をおこなったところ、実験条件と試行回数の主効果はみられなかったが、2要因間に交互作用が認められた($F(1, 28) = 17.52, P < 0.1$)。そこで単純主効果検定をおこなったところ、1・5・6回目の試行では1%、2・3・4回目の試行では5%水準で両条件間の評定に有意差がみられた。また、 $C_3 \cdot C_4$ 条件とも試行回数の主効果($F(5, 140) = 7.37, P < 0.1; F(5, 140) = 11.42, P < 0.1$)がみられた。すなわち、 $C_3 \cdot C_4$ のいずれの条件においても、自己優位のとき、自己のパフォーマンス結果を有意に高く評定し、自己劣位のとき、それを有意に低く評定しており、一貫した評価はなされていなかったのである。

これらのことから、実験操作は概ね有効であったと判断される。

2 関連性評定

課題遂行前と6回の遂行後、計7回の質問紙への回答により測定された関連性評定について、実験条件(4) × 関連性の下位次元(5) × 質問紙への回答回数(7)による3要因の分散分析がおこなわれた。その結果、3要因の主効果と要因間のすべての交互作用が認められた。また、4条件におけるトータルな関連性評定の平均値の変化と、5つの下位次元各々の平均値の変化をそれぞれ図3-1, 2, 3に示した。

それによると、トータルな関連性に関しては、 $C_1 \cdot C_2$ 条件の初期と $C_3 \cdot C_4$ 条件においてSEMモデルを支持する結果が得られた。すなわち、自己優位のときには関連性を高め、自己劣位の間にはそれを低めたのである。しかしながら、一貫して良い評価を受ける C_1 条件においては徐々にもとのレベルに戻り、一貫して悪い評価を受ける C_2 条件においては低いままで安定するようであった。

次に下位次元の変化をみると、 $C_1 \cdot C_2$ 条件においては、課題に対する興味・関心、自己のパフォーマンス結果に対する評価、それに対する満足度の変化は大きく、これに対して、課題の妥当性評価や自己定義に与える重要性といった自己概念に直接関わるような次元での変化は小さかった。他方 $C_3 \cdot C_4$ 条件では全次元で大きな変化がみられ、自己優位のときその評定は高いが、妥当性評価のみ、自己劣位のときそれを高く評定していた。

3. 親密さ評定

関連性評定と同様、実験条件(4) × 親密さの下位次元(5) × 質問紙への回答回数(7)による3要因の分散分析がおこなわれた。その結果、実験条件、回答回数の主効果と要因間のすべての交互作用が認められた。また、4条件におけるトータルな親密さ評定の平均値の変化と5つの下位次元各々の平均値の変化を図3-4, 5, 6に示した。

それによると、親密さが高いという条件設定であったにもかかわらず、関連性と同様、 $C_1 \cdot C_2$ 条件に関しては、親密さは一時的な変化はあるものの高いままで安定するかすぐに元のレベルにもどるようであった。

下位次元別にみると、いずれの群においても親密、交遊といった感情的な次元には有意な変化は認められない(単純主効果の結果、回答回数的主効果は4条件とも有意ではない)が、課題達成的な親密さである承認・共同・競争の次元で大きな変化がみられた。すなわち、 $C_1 \cdot C_2$ 条件においては、承認が元のレベルにもどり、共同は低いままで安定し、競

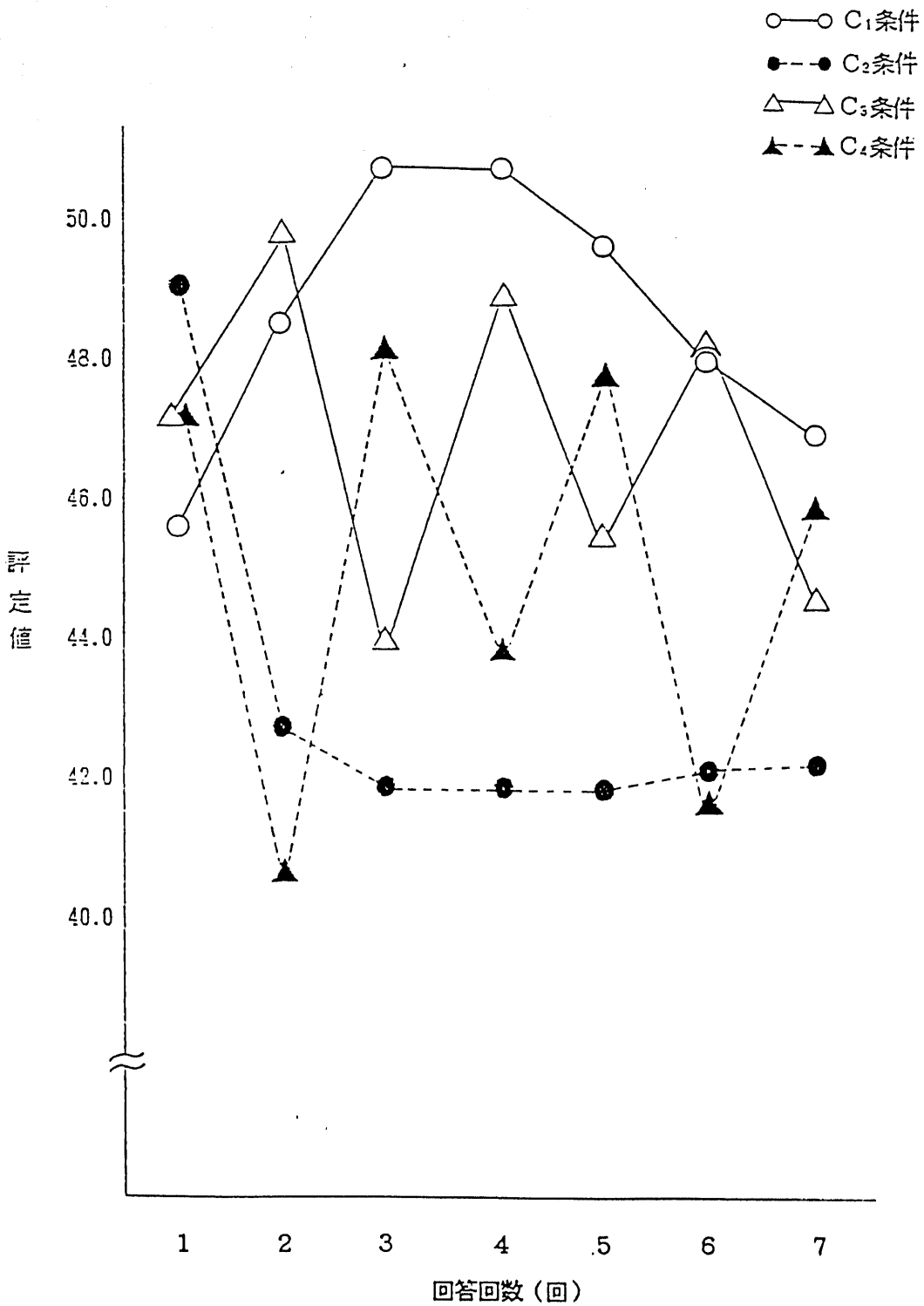
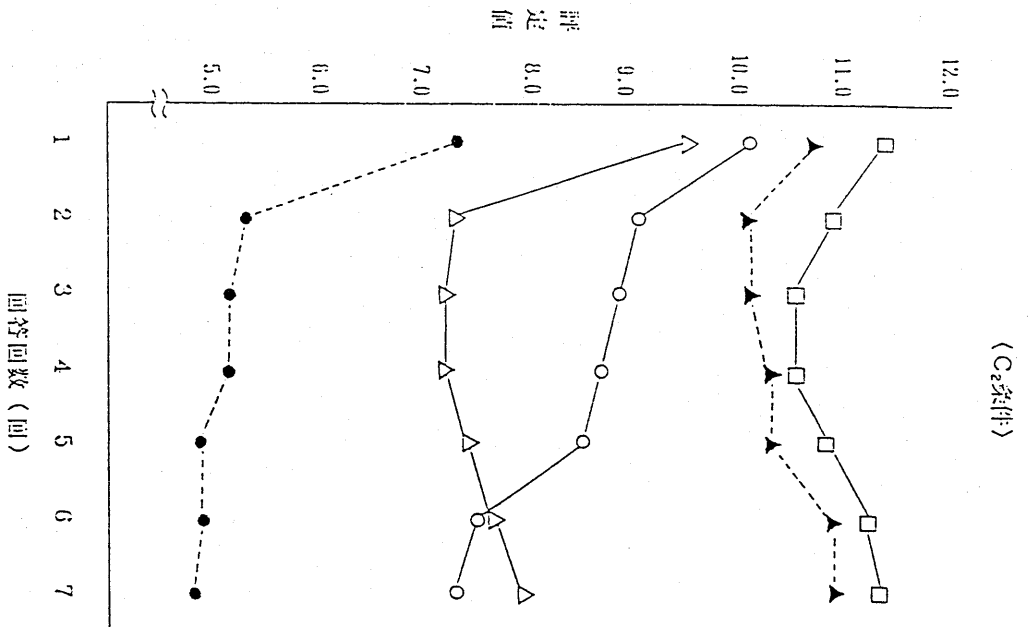
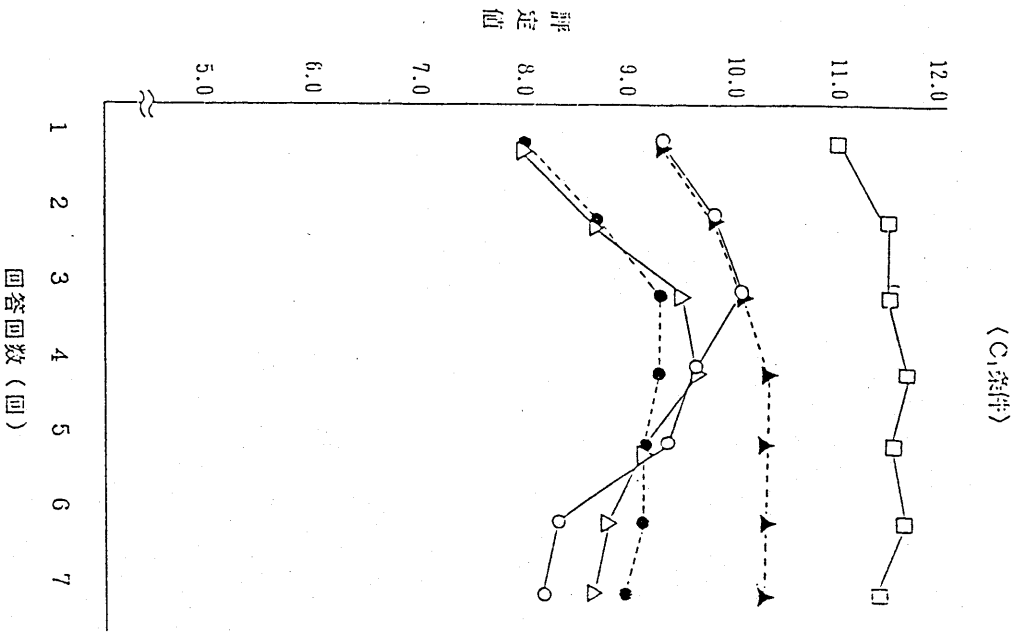
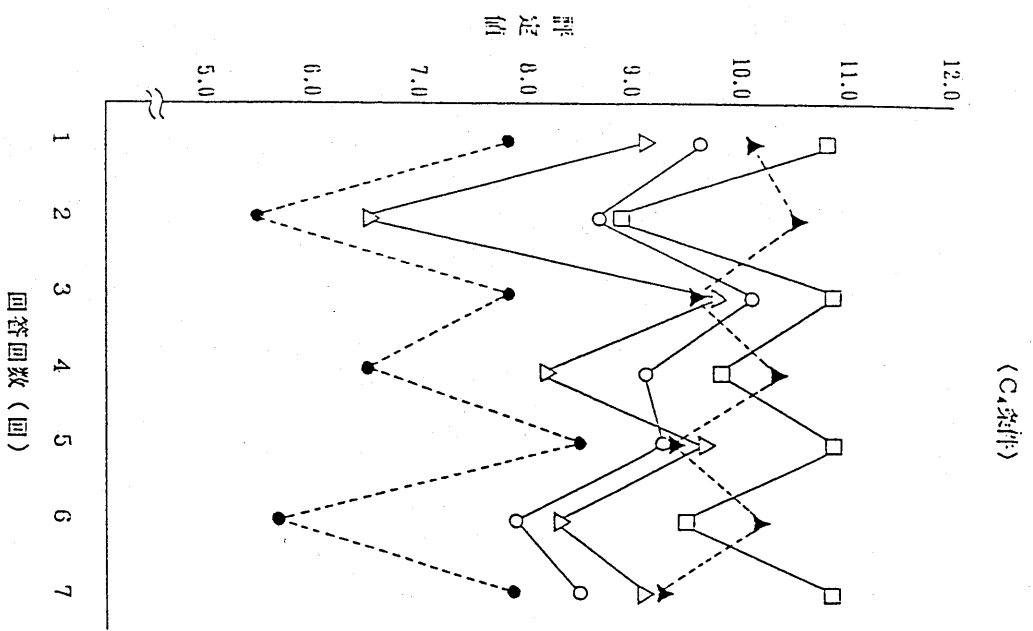
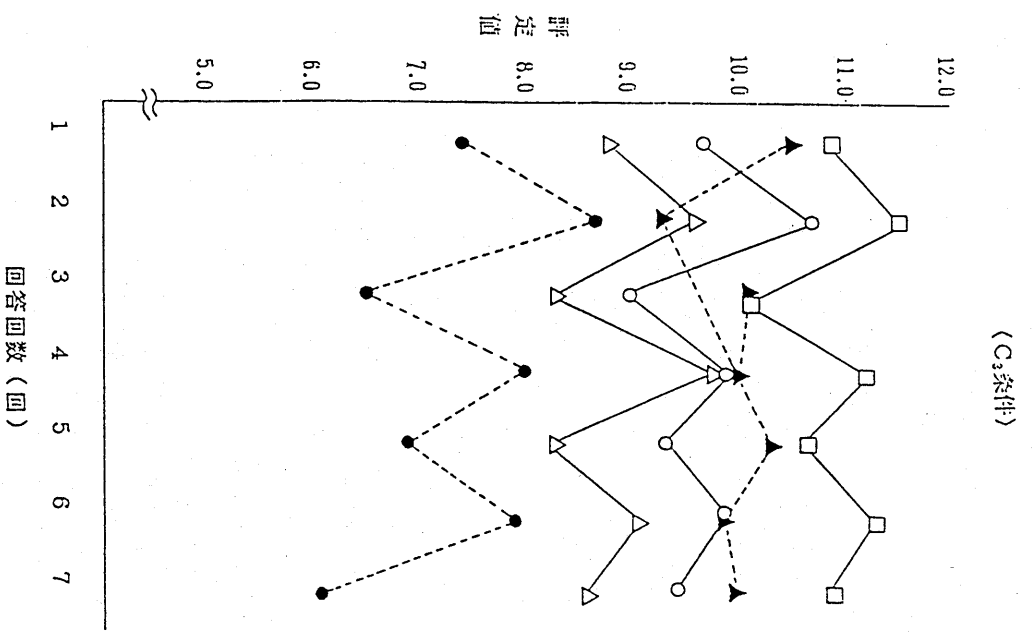


図 3-1 関連性評価の変化



- 問題に対する興味・関心
- 自分のパフォーマンス
- △—△ 結果に対する評価
- ▲—▲ パフォーマンスに対する満足度
- 問題の妥当性
- 自己定規にとっての相対性

図3-2 C1・C2条件における関連性評定の变化



- 理想に対する興味・関心
- 自己のパフォーマンスに対する評価
- △—△ パフォーマンスに対する満足度
- ▲—▲ 理想の達成目標
- 自己次第によっての達成性

図3-3 C₃・C₄条件における理想性評定の变化

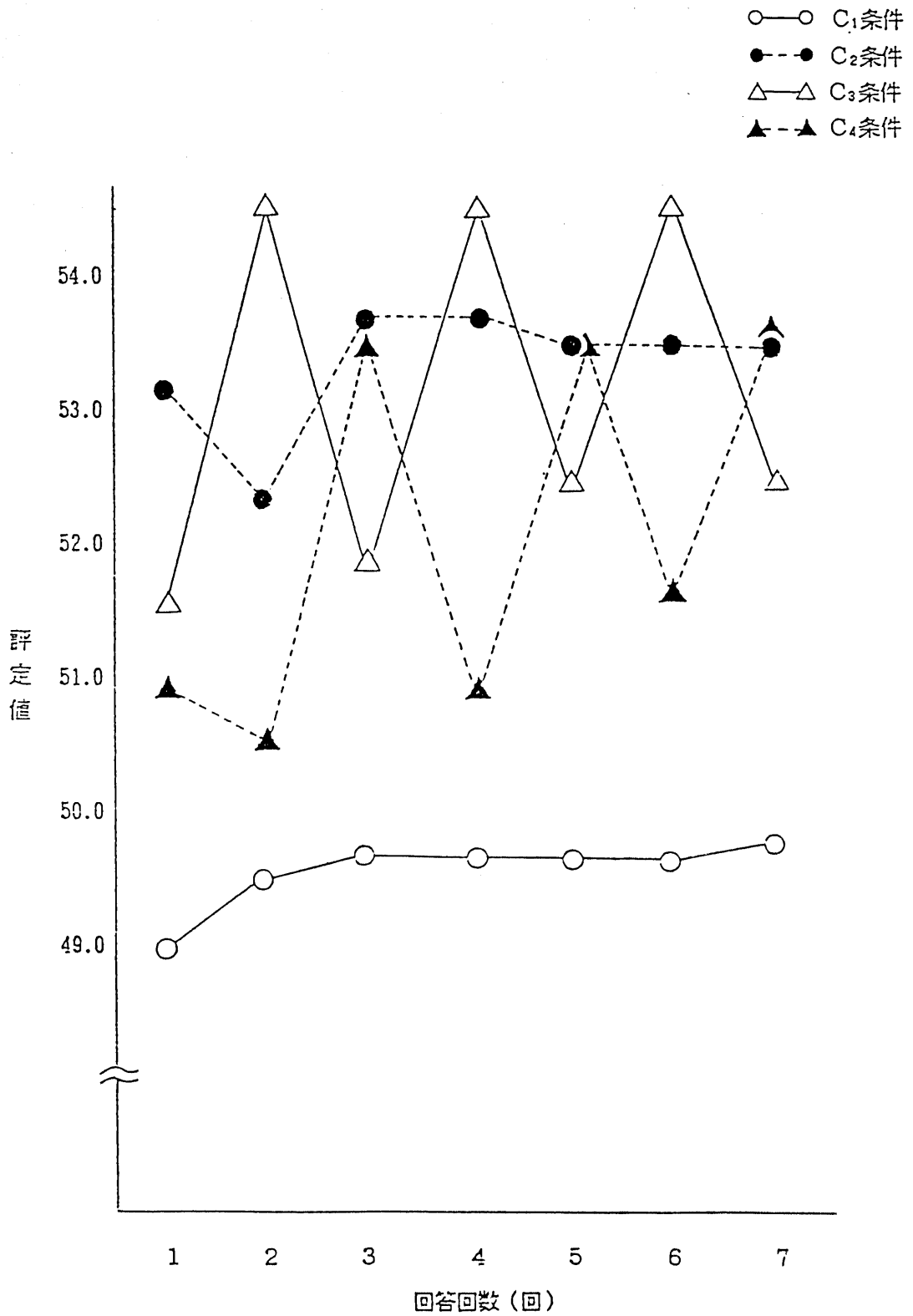
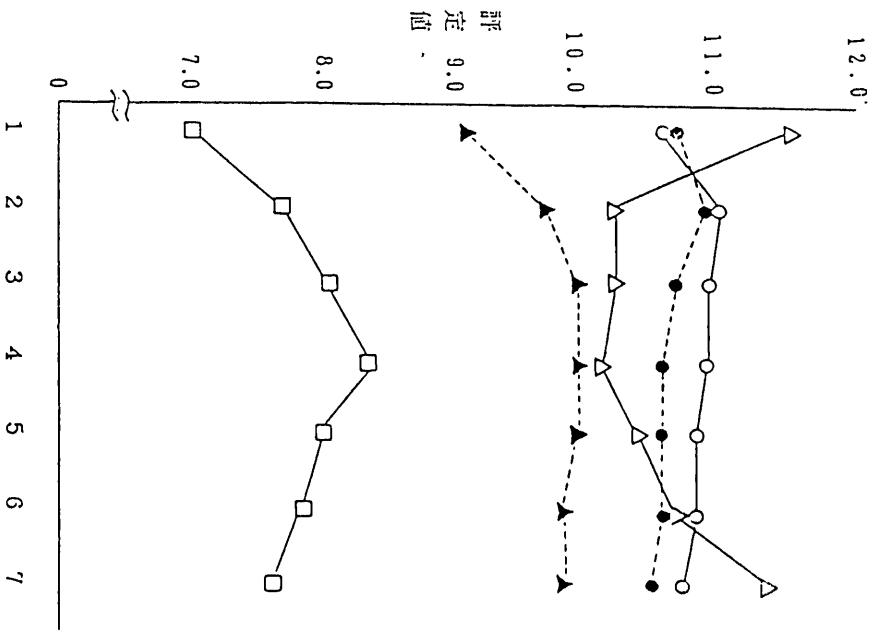
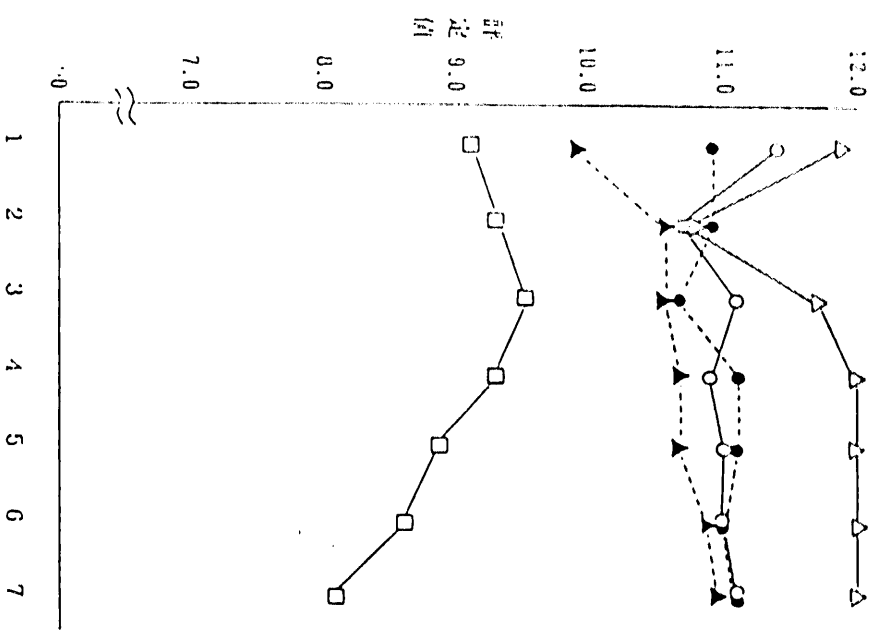


図3-4 親密さ評定の変化

< C₁条件 >



< C₂条件 >



- 親密次元
- 交遊次元
- △—△ 承認次元
- ▲—▲ 共同次元
- 競争次元

回答回数 (回)

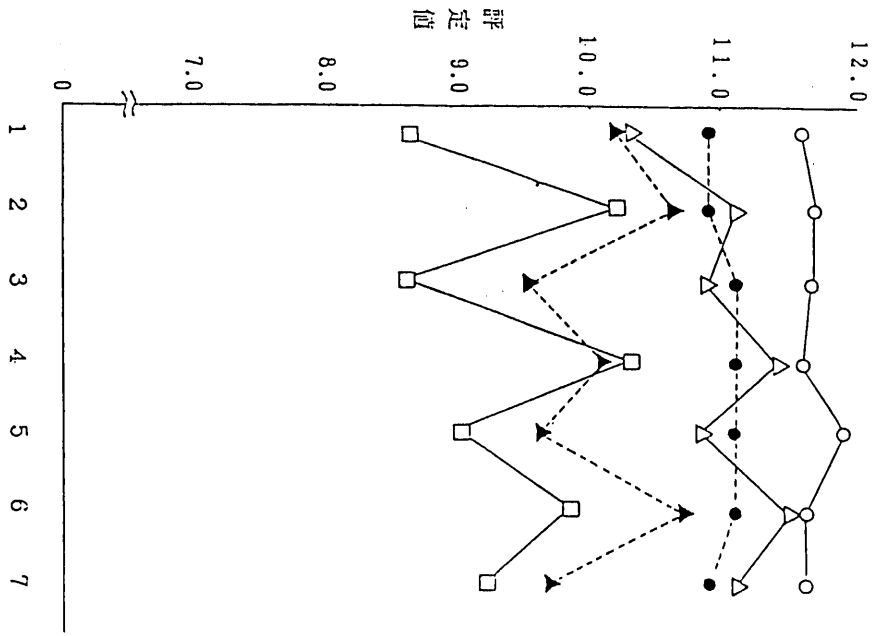
評
定
値

回答回数 (回)

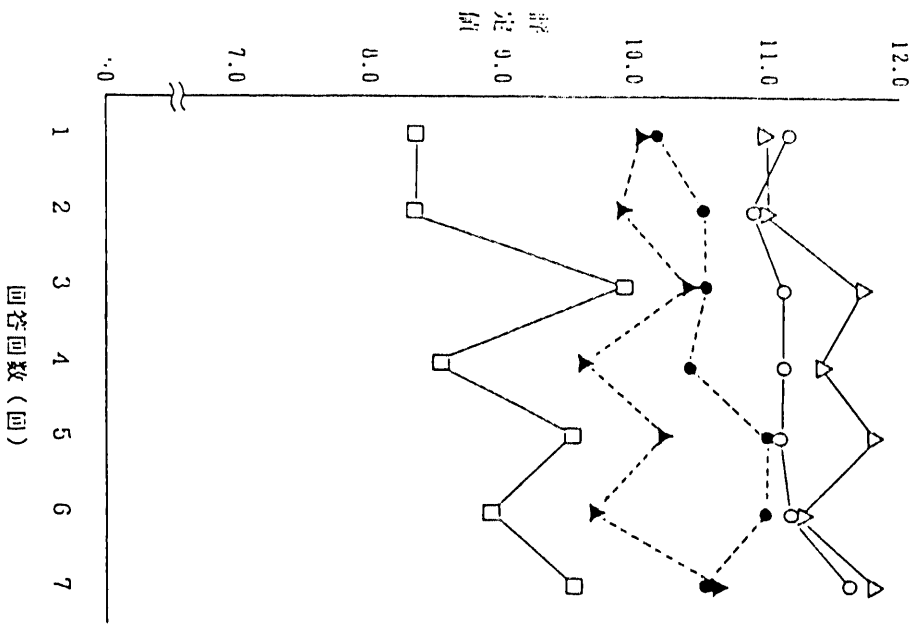
評
定
値

図3-5 C₁・C₂条件における親密さ評定の变化

(C₃条件)



(C₄条件)



- 親密次元
- 交遊次元
- △—△ 承認次元
- ▲---▲ 共同次元
- 競争次元

図3-6 C₃・C₄条件における親密さ評定の变化

争が減少傾向を示した。それに対して、 $C_3 \cdot C_4$ 条件では自己優位の時、3次元すべての評定は高く、自己劣位の時低かった。

したがってトータルな親密さの変化は、この3次元の変化によるものと考えられる。

4 比較対象としての友人に対する評定

達成行動において友人をどのような対象として認知しているか、についての4条件の平均値の変化と実験条件(4)×回答回数(7)の分散分析がおこなわれた。

まず、友人の得点に対する関心度では、回答回数の主効果($F(6, 336) = 38.12, P < .01$)と、実験条件×回答回数の交互作用($F(18, 336) = 4.97, P < 0.1$)が認められた。これは図3-7にみられるように、 $C_1 \cdot C_2$ 条件においては、はじめの2セッションの課題遂行では両条件間に殆ど差がないものの、3セッション後からは常に自己優位である C_1 条件の C_2 に対する関心度が大きく減少し、 $C_3 \cdot C_4$ 条件においては、常に自己劣位の際に関心度の高いことを示している。

協同相手としての認知に関して、回答回数の主効果($F(6, 336) = 2.47, p < .05$)と2要因の交互作用($F(18, 336) = 2.96, p < .01$)が認められた。図3-8によると、 $C_1 \cdot C_2$ 条件では、常に自己劣位である C_2 条件の評定が高く、逆に $C_3 \cdot C_4$ 条件では、常に自己優位の際、その評定が高かった。

競争相手としての認知については、回答回数の主効果($F(6, 336) = 8.88, p < .01$)と2要因の交互作用($F(18, 336) = 3.16, p < .01$)が認められた。図3-9をみると、 $C_1 \cdot C_2$ 条件では常に自己劣位である C_2 条件の評定が高く、 $C_3 \cdot C_4$ 条件でも常に自己劣位の際、その評定が高いといえる。

5 比較対象の選択

達成行動での友人に対する認知と対応させ、一般的な選択傾向にどのような違いがみられるかを検討するために、パフォーマンスの異なる4人からの選択をおこなわせ、実験条件(4)×比較対象(4)、実験条件(4)×比較対象(4)×回答回数(7)の分散分析がおこなわれた。

a) 協同相手

4条件をとおしての選択をみると、比較対象の要因間に有意差($p < .01$)が認められた。すなわち、Cが最も多く選好され、次いでA・Bが多

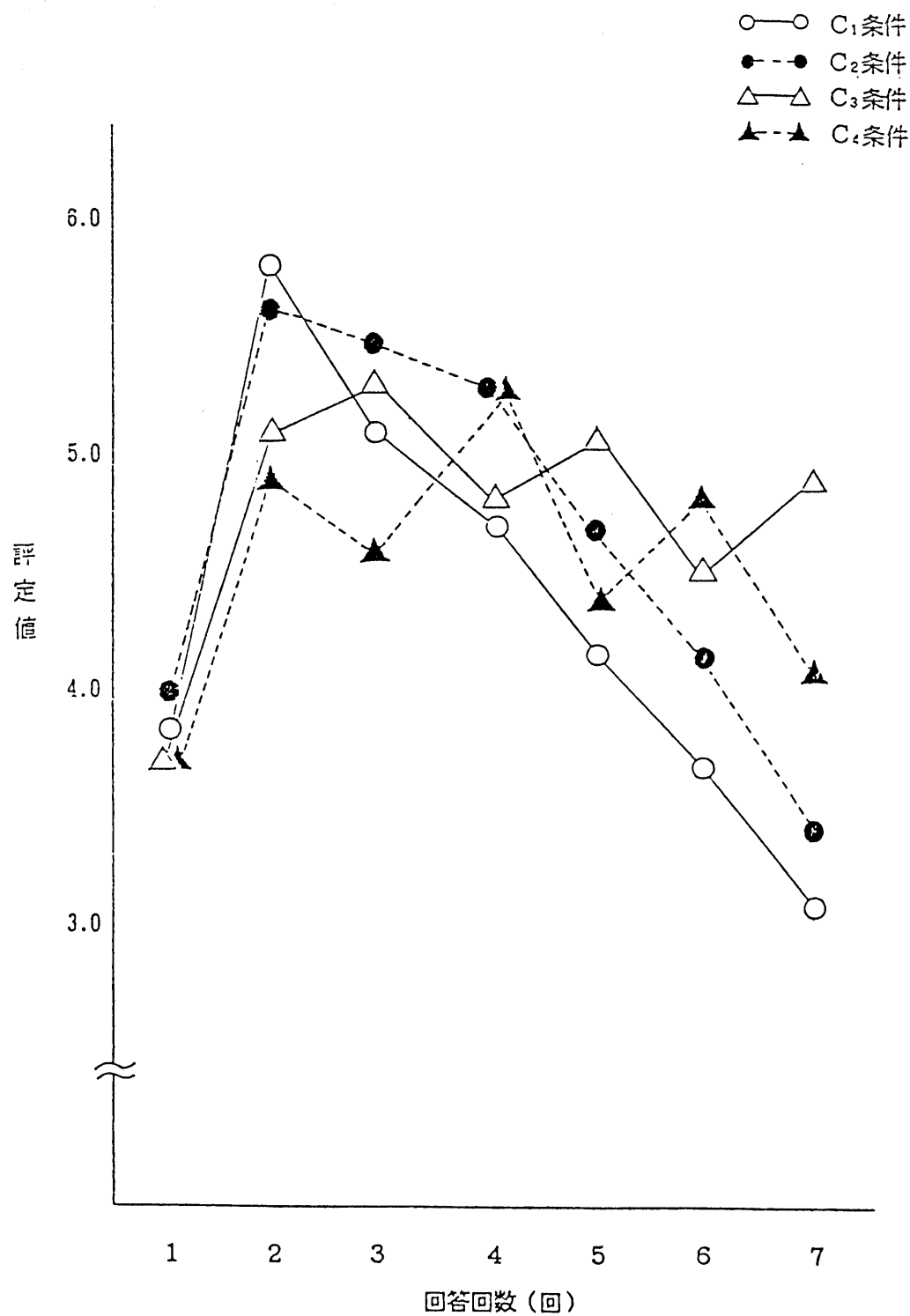


図 3-7 友人の得点に対する関心度評定の変化

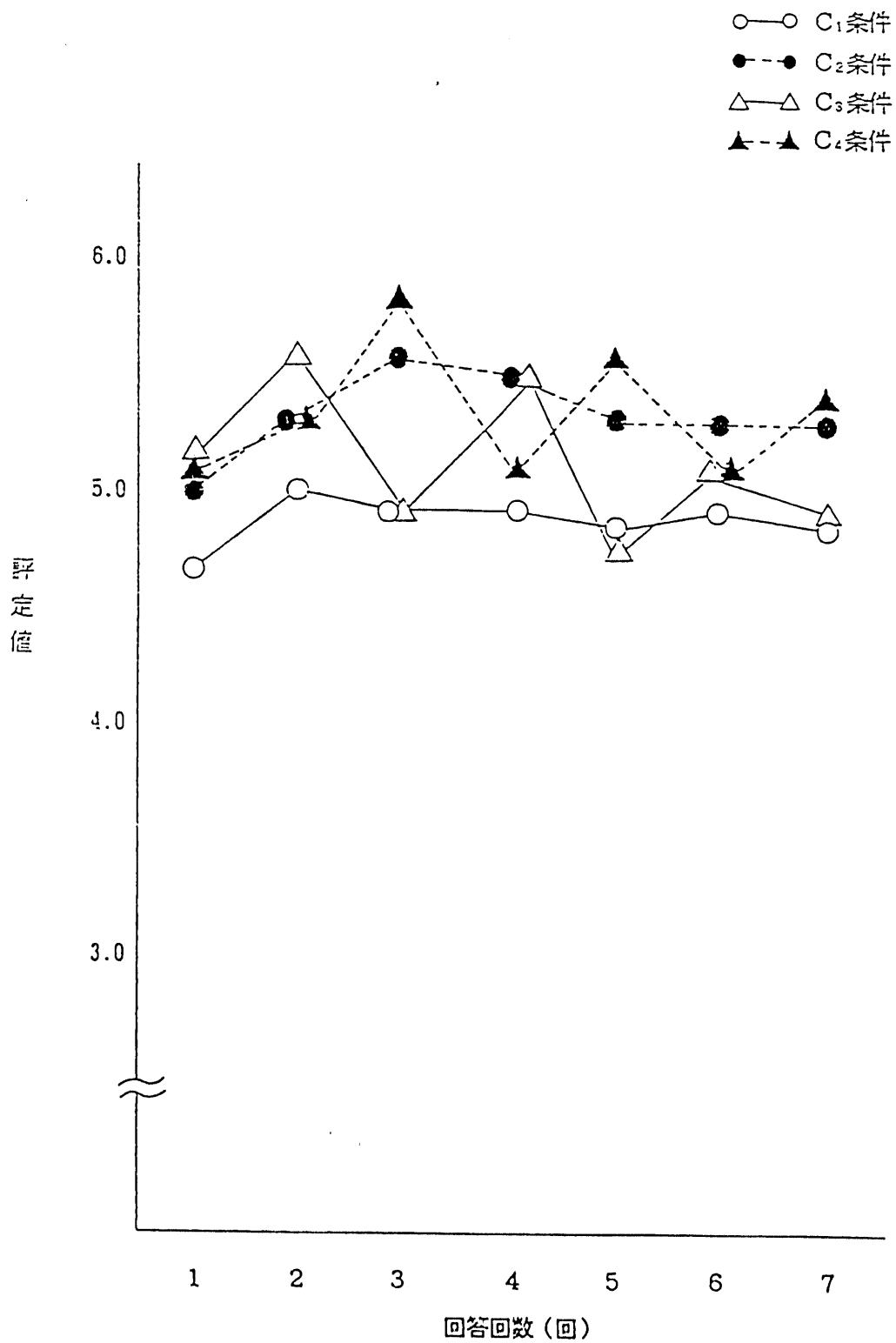


図 3-8 協同相手としての友人に対する評定の変化

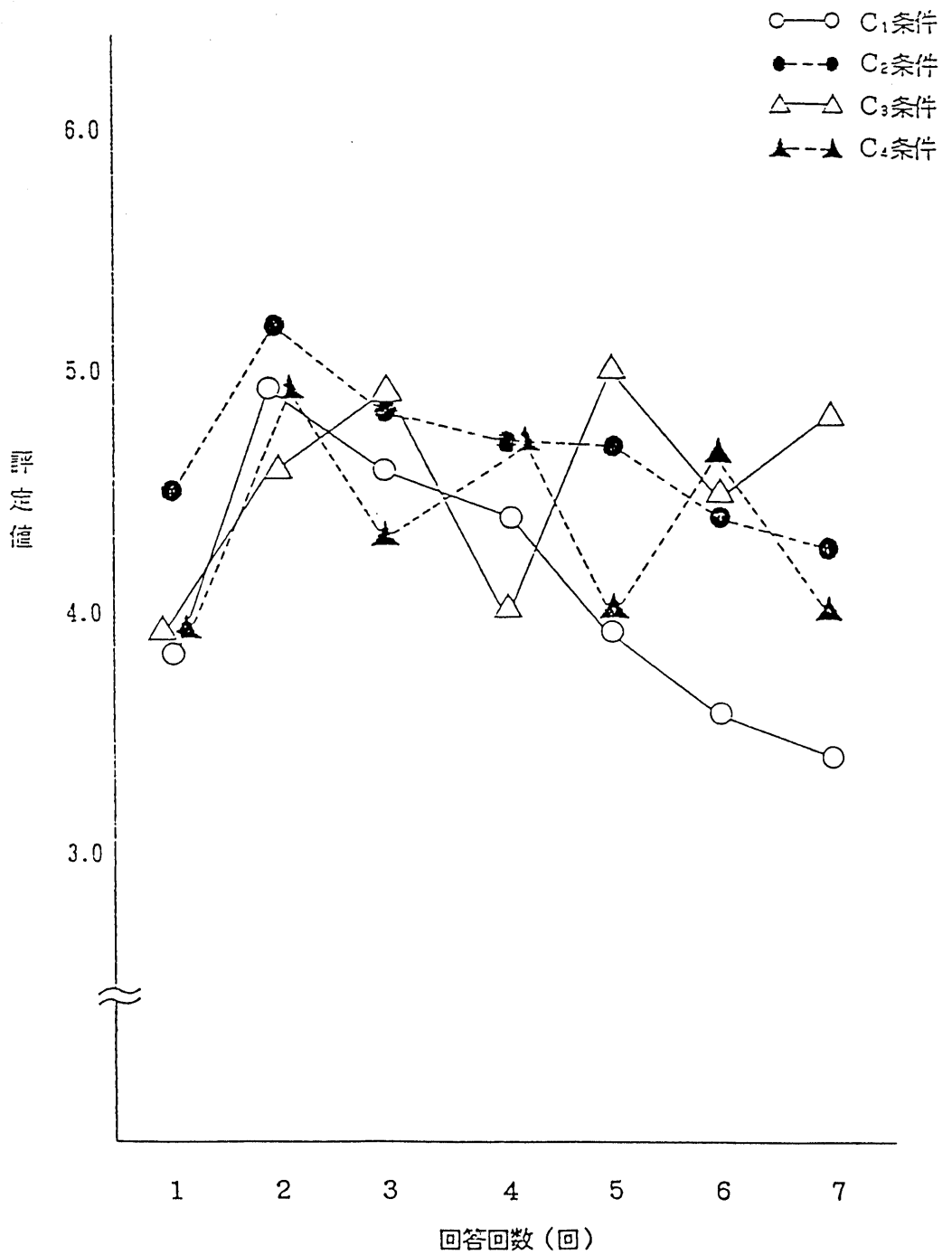


図3-9 競争相手としての友人に対する評定の変化

く、Dの選択は、極めて少なかった。これを条件別にみた場合、C、Dについては条件間に有意差は認められないものの、AについてはC₁条件での選択が多く ($p < .01$)、C₃条件では少なかった ($p < .05$)。また、BについてはC₂条件で多く ($p < .05$)、C₁条件で少なかった ($p < .05$) (表3-1 参照)。

これらの選択傾向の変化を示したのが、表3-2である。それによると、C₁条件では、A・C、C₂条件では、B・C、C₃・C₄条では自己優位るとき、A・C、自己劣位るときB・Cが選好されていた。

b) 競争相手

表3-3 に示すように、4条件を通してみると、C ($p < .01$)・B ($p < .05$)の選択が有意に多く、D ($p < .01$)の選択は少なかった。これを条件別にみると、A・Cの選択に関しては、C₁条件で多く ($p < .01$)、BではC₂条件 ($p < .05$)、DではC₃・C₄条件 ($p < .01$ 、 $p < .05$)で多かった。

表3-4 は4条件におけるこれらの変化を示したものである。それによると、C₁条件ではCからAへ、C₂条件ではBからA・Cへという選択の推移がみられる。C₃・C₄条件では一方的への変化はみられず、相対的には、自己優位るときには、A・C、自己劣位るときにはB・Dの選択が増すようであった。

6 課題選択

課題選択について実験条件(4)×課題(4)の分散分析をおこなったところほとんどの交互作用に有意な結果がみられた。表3-5 からも分かるように、全体的にはB課題が選好され ($p < .01$)、C課題の選択は少なかった ($p < .01$)。しかしながら、条件間で選択傾向に差異が認められた。例えば、A課題の選択に関してはC₁・C₂条件で少なく ($p < .01$)、C₃・C₄条件で多い ($p < .01$)のだが、D課題の選択では全く逆の傾向がみられた ($p < .01$) こと、B課題についてはC₂条件による選択のみが少ないこと、逆にC課題ではC₂条件による選択のみが多く ($p < .01$) C₃・C₄条件で少なかった(それぞれ $p < .01$)。すなわち、安定群であるC₁・C₂条件では、判別性のないA課題の選択が少なく、不安定群であるC₃・C₄条件では、低い能力について判別性のあるC・D課題の選択が少なかったといえる。

さらに選択傾向の推移について次のような示唆が得られた。表3-6 からも分かるように、C₁・C₂条件では、それぞれA・D課題、C課題と

表3-1 4条件における協同相手の選択

比較対象		A	B	C	D	
実験条件	C ₁	45	6	54	0	105
	C ₂	21	3	46	0	105
	C ₃	17	31	55	2	105
	C ₄	21	23	57	4	105
		104	98	212	6	420

表3-2 4条件における協同相手の選択の変化

回答回数	1	2	3	4	5	6	7	
協同相手	A B C D	A B C D	A B C D	A B C D	A B C D	A B C D	A B C D	A B C D
実験条件								
C ₁	4 5 6 0	5 1 9 0	6 0 9 0	6 0 9 0	7 0 8 0	8 0 7 0	9 0 6 0	45 6 54 0
C ₂	4 5 6 0	2 5 8 0	3 6 6 0	3 5 7 0	3 5 7 0	3 6 6 0	3 6 6 0	21 30 55 0
C ₃	3 3 8 1	3 1 11 0	0 7 7 1	5 2 8 0	0 7 8 0	6 2 7 0	0 9 6 0	17 31 55 2
C ₄	7 0 7 1	2 5 7 1	3 1 11 0	0 8 6 1	5 0 10 0	0 8 6 1	4 1 10 0	21 23 57 4
	18 13 27 2	12 12 35 1	12 14 33 1	14 15 30 1	15 12 33 0	17 10 26 1	16 10 28 0	104 90 202 6

表3-3 4条件における競争相手の選択

比較対象		A	B	C	D	
実験条件	C ₁	38	9	58	0	105
	C ₂	31	32	42	0	105
	C ₃	14	30	50	11	105
	C ₄	24	27	47	7	105
		107	98	197	18	420

表3-4 4条件における競争相手の選択の変化

回答回数	1				2				3				4				5				6				7				A B C D							
	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D								
競争相手	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D
C ₁	3	6	6	0	3	2	10	0	3	1	11	0	2	0	13	0	7	0	0	0	0	0	7	0	12	0	3	0	30	9	58	0				
実験条件 C ₂	8	3	4	0	2	9	4	0	3	0	4	0	4	6	5	0	4	4	7	0	4	2	9	0	6	0	9	0	31	32	42	0				
C ₃	4	3	7	1	3	2	8	2	1	9	3	2	2	4	9	0	0	7	5	3	3	1	10	1	1	4	8	2	14	30	50	11				
C ₄	6	2	6	1	3	5	5	2	3	2	10	0	0	0	5	2	4	2	9	0	2	6	5	2	6	2	7	0	24	27	47	7				
	21	14	23	2	11	18	27	4	10	20	20	2	0	10	32	2	15	13	29	3	17	9	31	3	25	6	27	2	107	98	197	18				

表3-5 4条件における判別的課題の選択

課題		A	B	C	D	
実験条件	C ₁	8	60	9	28	105
	C ₂	9	12	51	33	105
	C ₃	37	53	7	8	105
	C ₄	39	53	5	8	105
		93	178	72	77	420

表3-6 4条件における判別問題の選択の変化

回答回数	1	2	3	4	5	6	7	
課題	A B C D	A B C D	A B C D	A B C D	A B C D	A B C D	A B C D	A B C D
C ₁	7 4 1 3	1 4 4 6	0 10 2 3	0 10 2 3	0 12 0 3	0 11 0 4	0 9 0 6	0 60 9 28
C ₂	1 5 3 6	3 2 4 6	4 2 4 5	1 2 8 4	0 1 10 4	0 0 11 4	0 0 11 4	0 12 51 33
C ₃	4 8 0 3	4 7 2 2	8 5 1 1	5 10 0 0	7 8 0 0	3 8 3 1	8 7 1 1	37 53 7 8
C ₄	2 6 3 4	7 8 0 0	6 7 1 1	6 9 0 0	5 0 0 1	7 8 0 0	6 6 1 2	39 53 5 8
	14 23 7 16	15 21 10 14	18 24 8 10	12 31 10 7	12 30 10 8	10 27 14 9	12 22 13 13	93 178 72 77

いった自己の能力レベルについて判別性のある課題を選好するようになるのに対し、 $C_3 \cdot C_4$ 条件では自己劣位の時、低い能力について判別的な課題の選択を避ける選好をおこなうのであった。

第6節 考察

本研究では、課題に対する能力についての評価基準の明確さや安定さの段階によって自己防衛的あるいは自己高揚的评价機能と正確な自己評価機能のいずれが優位にはたらくかを関連性、親密さ、比較対象・課題の選択などの違いから明らかにすることを目的とした。

1 関連性

図3-2 にみられるように、安定群である $C_1 \cdot C_2$ 条件においては、課題に対する興味・関心、自己のパフォーマンス結果に対する評価、それに対する満足度といった比較的下位の次元では大きな変化がみられたが、課題の妥当性評価、自己定義にとっての重要性といった自己概念に直接関わる高位次元での変化は相対的に小さかった。特に、 C_1 条件においては、この2次元とパフォーマンス結果の評価次元は高いままで安定しており、興味・関心や満足次元が大きく減少を示すようになる。このことから C_1 条件での関連性評定の変化はこの2次元の変化によるものであり、高次元での関連性の変化は少ないものと思われる。

C_2 次元においては、1セッション後いったんは全次元が減少するが、妥当性評価と重要性次元は他の次元よりも変動が少なく、元のレベルにまで戻るようであった。また、満足度次元が先の2次元にともなって徐々に高まる傾向にあることから、評価が安定することによって自己のパフォーマンスを認め、受容できるようになるとも考えられる。

それに対し、不安定群である $C_3 \cdot C_4$ 条件においては、関連性のすべての次元で大きな変動がみられた。すなわち、自己優位の時、その評定を高め、自己劣位の時には低めたのである。

しかしながら、予測に反して、妥当性評価のみ、他の4次元と逆の評定変化を示した。また、パフォーマンスの自己評価項目での評定が実験操作と一致して上下するにも関わらず、内省報告では、自己の能力を全く否定的に捉えた記述をする傾向が強かったことから、これは、日本人には、低い自己評価に陥り易く、自己優位の場合にその情報を否認しようとする傾向があり（高田，1984，1987）、そのため自己優位の時、

自己のパフォーマンス結果を否認する意味で課題の妥当性評価が低まったものと思われる。

以上のことから、関連性に関しては、ほぼ仮説は支持されたといえよう。すなわち、評価基準が安定しない場合には、自己防衛的および自己高揚的なSEMモデルを支持する方向で全次元の関連性を変化させるが、評価基準が安定している場合には自己概念に直接関わる次元の関連性を変化させることは少ないのである。

2 親密さ

他者との心理的な親密さが高いという前提条件で実験をおこなったにも関わらず、図3-4 にみられるように、評定にも変化がみられた。しかしながら、図3-5,6 から分かるように、親密さの評定の変化は承認・共同・競争といった課題達成的な次元の変化によるものと思われる（いずれの条件においても親密・交遊次元における回答回数の主効果はみられなかった。

この変化を条件別にみってみる。まず、 C_1 条件においては承認と競争次元が相反する結果となっているが、これはセッションの初期には自尊感情を高める意味での比較欲求がはたらくが、徐々にその欲求は減少し、 C_2 の低いパフォーマンスも受容・承認するようになることを示すものと思われる。

C_2 条件も同様に、第1セッションにおいては C_1 を競争相手として意識するため、 C_1 のパフォーマンスに対して否定的だが、 C_1 のパフォーマンスが高く安定すると、競争相手でなく、協同相手としての認知を高めるようであった。

これに対し、与えられる評価が一貫していない C_3 ・ C_4 条件においては、常に自己優位の時、課題達成次元での親密さを増大させる傾向が認められた。これに関連するものとして高田ら（1979）の報告があげられる。それは、「人には自己評価に際して物理的手段が用いられる場合でも、その情報が自尊感情を高める性質を有するときは、他者との比較を続けて、自分の優越性を積極的に確認しようとする傾向がある」というもので、 C_3 ・ C_4 条件における親密さ操作の傾向も高田らの指摘する劣ったものとの比較による自己防衛的および自己高揚的評価機能の表れであると考えられる。

このように能力の比較場面においては、比較他者が心理的に親密なときでさえ、課題達成的次元の親密さを変化させるのであった。このこと

から、SEMモデルで問題とされていた親密さは、厳密にはこの次元における親密さであるのではないかと考えられる。

概して、親密さに関しても仮説は支持された。すなわち、評価基準が不明確で不安定な状況においては、他者に対する心理的な親密さも変動しやすく、自己優位の際には他者に対しても受容的だが、自己劣位の際には受容的になりにくいようであった。これは「自己評価レベルの低い人は相手から受容されなかったと感じやすく、相手に対する魅力や好意も低められる」、また「自己評価のレベルの高い人ほど他の人に対しても好意的態度をもちがちである」という梶田（1980）の知見とも類似するものである。

しかしながら、評価基準が安定してくると自他の優劣の影響は減少し、他者に対する親密さも安定して受容的になり得るようであった。

3 達成行動における友人に対する認知

課題達成次元での親密さ評定と対応させ、友人を達成行動場面でどのような対象として認知しているかについての分析をおこなった。

それによると、友人の得点に対する関心度は概して自己劣位の際に高いといえる。しかしながら、一貫した評価が与えられ、評価基準が安定してくるとその関心度も低まる（図3-7参照）。これは、セッションが進むにつれて相手の点数が気にならなくなった、という被験者の内省報告からも指摘され得る。

協同相手としての評定においては、評価の安定性の如何によって友人に対する認知のしかたに逆の傾向が認められた。すなわち、安定群では常に自己劣位であるC₂からC₁への評定が高いのに対し、不安定群では自己優位の際、友人への評定が高かったのである。これは自己の能力評価が不明確なため自己より劣った者との協同を通しての比較によって、それをより高いものとして認知しようとする自己高揚的欲求の表れであると思われる。

競争相手としての評定に関しては、常に自己劣位にある者の方が優位にある者を競争相手としてより高く認知した。これは向上性指向の表れであると思われる。この結果は、一見、親密さの競争次元での評定と矛盾するようである。しかしながら、質問項目の記述からもわかるように、親密さの測度として扱ったものは単に競い合うだけの相手としての評定である。すなわち、単なる競争相手としては自分より優位にある者を選好するが、そこに友人としての要件が加えられた場合は、自己より優位

であることは望まれにくくなることが示唆されたのである。

4 比較対象の選択

では、選択が許される場合はどのような他者を比較対象として選好するのであろうか。

協同相手に関する分析結果によれば、概して、自己と同程度かそれより少し優れた能力の者が協同相手として好まれるようであった。また、評価基準が安定してくると、より能力レベルの高い他者との協同欲求が高まる傾向もみられた。

競争相手に関しては、 C_1 条件ではA・C、 C_2 条件ではB・C、 C_3 ・ C_4 条件では自己優位の時A・C、自己劣位の時B・Cが相対的に多く選択されていることから、概して、自分と同程度かそれより少し優れた他者が競争相手として好まれるようである。しかしながら、評価基準が安定してくると、常に劣位である C_2 条件においてさえパフォーマンスの低いものへの選択がなされなくなることや C_1 条件におけるAとCの選択の交互作用からもわかるように、向上性指向がより強く現れ、自己よりもさらに能力レベルの高い他者を好むようになることが指摘された。

5 課題選択の選択

課題選択に関する分析結果は全く仮説を支持するものであった。

安定群である C_1 ・ C_2 条件においては、不安定群である C_3 ・ C_4 条件と比較して、自己の能力レベルについて判別性のある課題の選択が有意に多く、判別性のない課題の選択が少なかった。この両群間の選択傾向の差異は、低い能力を判別しうるC・D課題の選択において最も顕著に表れている。すなわち、 C_2 条件は常に自己劣位であるにも関わらずこれらの選択が多いのに対し、 C_3 ・ C_4 条件では全セッションを通してその選択を避けるという自己防衛的な選択傾向が強くみられたのである。これは自己防衛的評価機能の作用を示唆するものである。

また、前述の C_2 条件の選択傾向と、より難易度の高いD課題の選択が増すという C_1 条件の選択傾向は、自己の能力レベルをより明確にしようとする方向でのものであり、Trope (1983) が指摘する正確な自己評価機能の表れであると考えられる。

第7節 全体的考察

本研究では、正確な自己評価機能、自己防衛的評価機能、自己高揚的評価機能の3つの評価機能を取りあげ、課題と自己定義との関連性、比較他者との心理的な親密さ、比較対象・課題の選択等の側面から、問題とする能力についての評価基準の明確さ・安定性の有無によって、いずれが優位に作用するのかを段階的に捉えることを試みた。

分析結果は、概して仮説を支持するものであった。以下、それらに具体的に考察を加えていく。

1 自己防衛的あるいは自己高揚的評価機能と関連属性の変化

パフォーマンスの相対的な優劣に一貫性がない不安定群においては、関連性の全次元と比較他者との心理的な親密さの変動が大きく、自己優位のときそれらを高め、自己劣位のときそれらを低めるという自己防衛的または自己高揚的な方向での操作をおこなう傾向がみられた。これは、自己評価の防衛・高揚を基本仮説とするTesser (1982) のSEMモデルと一致するものであった。

また、達成行動における比較対象・課題の選択傾向については以下のとおりである。協同相手としては自己の同レベルかそれより僅かに優れた他者を好み、競争相手としては、概して、自己と同レベルかそれより僅かに優れた他者を好むが、明らかな比較場面で自己劣位の状況にあるときには自己より劣った者を選択することもあった。これは、「ネガティブな情報を与えられた個人が、自分よりもはるかにネガティブな特性をもつ他者と比較をおこなう傾向がある」というHakmiller (1966) の報告と一致するものである。

課題に関しても、低い能力について判別的な課題を避けるという自己防衛的な選択がなされがちであり、この傾向は、特に自己劣位のときに強くみられた。

これらのことから、評価基準が明確でない場合は、自己防衛的または自己高揚的な方略を用いることによって自尊心や自己評価を最大に防衛・高揚しようとする心理機制が強く働いていることが指摘された。

2 正確な自己評価機能と関連属性の変化

一方、パフォーマンスの相対的な優劣が一貫している安定群でも、セッションの初期においては不安定群と同様の関連性・親密さ操作や比較対象・課題の選択がなされるがセッションの進行にともない、両群間に差異がみられるようになった。

関連性・親密さについてみると、自己概念に直結しない下位次元の関連性の変化は大きいものの、高次元の関連性や親密さの変化は小さくなっていく。また、比較対象の選択に関しても、自己の優劣に関係なく、よりパフォーマンスレベルの高い他者を競争相手として選好する等、向上指向が強くみられるようになる。

課題選択に関しては、自己能力レベルの高低に関係なく、それが判別的な課題ほど選好されるようになるが、これはTrope (1983) の「人には、正確な能力レベルを明らかにしようとする欲求があり、その方向での課題選択がなされる」という報告と一致するものであった。特に自己の能力レベルの高いことが明確になるとより難易度の高い課題を選択するようになるが、これは高い能力についてさらに判別的なため、それを遂行することによってどの程度高いのかを査定しようとする (Trope, 1983) 心理的機制によるものと思われる。

3 自己防衛的および自己高揚的評価機能と正確な自己評価機能の相対的な重要性

このように安定群における諸側面の推移をみてみると、セッションの初期と後期とでは作用している評価欲求の質に明らかな違いをみいだすことができる。すなわち、その初期においては自己のパフォーマンスを防衛・高揚させる方向での評価欲求が強くみられるのに対し、セッションの進行にともなって、能力レベルの高低に関係なく向上指向が強くなり、自己の絶対的なパフォーマンスを増大させるために、より正確な能力査定をおこなおうとする評価欲求が強くなるようであった。これは、C₁条件の達成行動における比較対象・課題選択の推移に顕著に表れている。

これらのことから、評価基準が明確でない段階では自己防衛的および自己高揚的評価機能が優位に働き、それらが明確となるにしたがって正確な自己評価機能が優位にはたらくことが示唆された。

4 本研究の問題点と今後の課題

本研究では、自己評価基準の明確さ、安定性は、自他のパフォーマンスの相対的な優劣の一貫性によって操作された。しかしながら、自己評価過程においては個人差があり、他にも評価基準に影響を及ぼす要因が存在すると思われる。例えば、Strube & Roemmele (1985) は自尊感情の高低とセルフハンディキャップ傾向の強弱で被験者を4つの群に分けて

課題の選択傾向の相違を検討し、自尊感情が低く、セルフハンディキャップ傾向の強い人は自己防衛欲求が強く働き、失敗の判別性の低い課題を選好するが、他の被験者は成功の判別性の高い課題を選好する、という結果を得ている。この報告にしたがい、本研究においても被験者を自尊感情の高低に分け、実験条件(4)×自尊感情(2)×課題(4)の χ^2 の分散分析をおこなったところ、いくつかの自尊感情×課題の交互作用が認められた(例えば、C₁条件におけるD課題の選択は自尊感情の高い被験者に多かった($p < .05$))。したがって本研究では分析において不備な点が多く、得られた結果についてのさらに詳細な分析とともに、自尊感情の高低による評価機能発現の相違についての検討が必要とされるであろう。

〈参考文献〉

- ・ Albert, S. 1977 Temporal comparison theory. Psychological Review, 54, 485-503.
- ・ 関 千寿 1982 対人感情と自他のパフォーマンス評価に及ぼす自他関係の効果 心理学研究, 53(5), 253-258.
- ・ 関 千寿 1982 対人好悪感情の形成に及ぼす自他のパフォーマンスの差異 日本心理学会第46回大会予稿集, 401.
- ・ 関 千寿 1981 対人行動と社会的自己 遠藤辰男(編著) アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版, 138-148.
- ・ Brikman, P. & Bulman, R. J. 1977 Pleasure and pain in social comparison. In J. Suls & R. L. Miller (Eds.) Social comparison processes: Theoretical and empirical perspectives. Washington, DC: Halsted Wiley.
- ・ Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. Human Relations, 7, 117-140.
- ・ 藤森立男 1980 態度の類似性、話題の重要性が対人魅力に及ぼす効果—魅力次元との関連において— 実験社会心理学, 20(1), 35-43.
- ・ 古畑和幸(編) 1980 人間関係の社会心理学 心理学叢書=1 サイエンス社, 229-250.
- ・ Gordon, B. F. 1966 Influence and social comparison as motives for affiliation. Journal of Experimental Social Psychology, Supplement 1, 55-65.
- ・ Hakmiller, K. L. 1966 Threat as a determinant of downward comparison. Journal of Social Psychology, Supplement 1, 32-39.
- ・ 梶田毅一 1985 子供の自己概念と教育 東京大学出版.
- ・ 梶田毅一 1980 自己意識の心理学 東京大学出版.
- ・ 狩野素朗 1985 個と集団の社会心理学 ナカニシヤ出版, 27-37.
- ・ Latané, B. (Eds.) 1966 Studies in social comparison—Introduction and overview. Journal of Experimental Social Psychology, Supplement 1, 1-5.
- ・ 中村陽吉 1983 対人場面の心理 東京大学出版.
- ・ 中村陽吉 1983 実験社会心理学における自己—導入 日本グループダイナミクス学会第31界大会発表論文集, S-1.
- ・ Pleban, R. & Tesser, A. 1981 The effect of relevance and quality of another's performance on interpersonal closeness. Social Psychology Quarterly, 44, 278-285.

- ・ Shaw, M.E. & Costanzo, P.R. 1982 Theories of social psychology. McGraw-Hill.
古畑和孝 (監訳) 1984 社会心理学の理論II サイエンス社, 301-315.
- ・ Sturube, M.J. & Rommele, L.A. 1985 Self-enhancement, self-assessment, and self-evaluative task choice. Journal of Personality and Social Psychology, 49(4), 981-993.
- ・ Strube, M.J., Lott, C.L., Le-Xuan-Hy, G.M., Oxenberg, J. & Deichman, A.K. 1986 Self-evaluation of abilities: Accurate self-enhancement. Journal of Personality and Social Psychology, 51(1), 16-25.
- ・ 対人行動学研究会 (編) 1986 対人行動の心理学 誠信書房.
- ・ 高田千恵子, 高田利武 1976 能力の自己評価に及ぼすモデルの影響—社会的比較過程の2機能— 心理学研究, 47, 74-84.
- ・ 高田利武 1974 社会的比較過程についての基礎的研究 I 実験社会心理学, 14(2), 132-138.
- ・ 高田利武 1987 社会的比較による自己評価における自己卑下の傾向 実験社会心理学, 27(1), 27-36.
- ・ 高田利武 1971 対人迎合の決定因としての社会的比較過程の効果 早稲田心理学年報, 3, 10-16.
- ・ Tesser, A. 1980 Self-esteem maintenance in family dynamic. Journal of Personality and Social Psychology, 39, 77-91.
- ・ Tesser, A. & Campbell, J. 1980 Self-definition: The impact of the relative performance and similarity of others. Social Psychology Quarterly, 43, 341-347.
- ・ Tesser, A. & Campbell, J. 1982a A self-evaluation maintenance approach to school behavior. Educational Psychologist, 17, 1-12.
- ・ Tesser, A. & Campbell, J. 1982b Self-evaluation maintenance and the perception of friends strangers. Journal of Personality and Social Psychology, 50, 261-279
- ・ Tesser, A. & Campbell, T. 1983 Self-definition and self-evaluation maintenance. In J.Suls & A.Greenwald(Eds.) Psychological perspectives on the self. New York: Academic press.
- ・ Tesser, A. & Campbell, J. 1985 A self-evaluation maintenance model of student motivation. Ames, C. & Ames, R.(Eds.) Research on motivation in education, 2. Academic press.
- ・ Tesser, A. & Campbell, T. & Smith, M. 1984 Friendship choice and performance: Self-evaluation maintenance in children. Journal of Personality and Social Psychology, 46, 561-574.

- Tesser, A. & Paulhus, D. 1983 The definition of self : private and public self-evaluation maintenance strategies. Journal of Personality and Social Psychology, 44, 672-682.
- Tesser, A. & Smith, T. 1980 Some effects of friendship and task relevance on helping : You don't always help the one you like. Journal of Experimental Social Psychology, 16, 582-590.
- Trope, Y. 1975 Seeking information about one's own ability as a determinant of choice among tasks. Journal of Personality and Social Psychology, 32, 1004-1013.
- Trope, Y. 1980 Self-assessment, self-enhancement, and task preference. Journal of Experimental Social Psychology, 16, 116-129.
- Trope, Y. 1982 Confirmatory and diagnosing strategies in social information gathering. Journal of Personality and Social Psychology, 43(1), 22-34.
- Trope, Y. 1983 Self-assessment in achievement behavior. In J. Suls & A. Greenward (Eds.) Psychological perspectives on the self, 2.
- Trope, Y. & Ben-Yair, E. 1982 Task construction and persistence as means for self-assessment of abilities. Journal of Personality and Social Psychology, 42 (4), 637-645.
- Trope, Y. & Brickman, P. 1975 Difficulty and diagnosticity as determinants of choice among tasks. Journal of Personality and Social Psychology, 31, 918-925.
- Wheeler, L. 1966 Motivation as a determinant of upward comparison. Journal of Experimental Social Psychology, Supplement 1, 27-31.

〔友だちとの比較の調べ〕

学年・組・番号 ()

氏名 ()

私たちは、日頃、よく自分にはどのくらい能力（例えば、学力、運動能力、芸術能力など）があるのか、また、どのくらい背が高くきれい（ハンサム）であるのかなど知りたいと考えています。自分の能力や容姿、態度などがどの位であるのかを知ろうとするとき、他の人と比べたり、自分の過去や理想と比べたりします。自分にとって重要な問題（友だち選択や進路決定など）であればあるほど、親友に相談したりそれとなく意見をきいたりします。また、自分だけで熟慮して決めてしまうばあいもあります。

それでは、以下の設問につき、あなたが日頃思ったり考えたりしていること回答してください。

〔質問1〕 「あなたが、日頃、あなた自身にとって重要であると思う能力や特性などを2つだけあげてください。」

(Q1:)

(Q2:)

〔質問2〕 「あなたが、日頃、あなた自身にとって重要であると思わない能力や特性などを2つだけあげてください。」

(Q3:)

(Q4:)

〔質問3〕 「親友・もしくはそれに近いと思われる同性・同年代の知人、あるいは、一緒にいることが楽しい友人を一人あげてください。その人が誰であるか特定するためにイニシャルや記号等を記入してください。」

(Q5:)

〔質問4〕 「とくに好意をもっているわけではない同性・同年代の知人、あるいは、一緒にいることが楽しくない知人を一人あげてください。その人が誰であるか特定するためにイニシャルや記号等を記入してください。」

(Q6:)

〔質問5〕 「Q1、2、3、4、につき、あなたとQ5とではどちらが優れているか、同程度であるか、劣っているか、3件法で回答してください。」

(Q7: Q1につき、あなたが優れている、同程度である、劣っている)

(Q8: Q2につき、あなたが優れている、同程度である、劣っている)

(Q9: Q3につき、あなたが優れている、同程度である、劣っている)

(Q10: Q4につき、あなたが優れている、同程度である、劣っている)

〔質問6〕 「Q1、2、3、4につき、あなたとQ6とではどちらが優れているか、同程度であるか、劣っているか、3件法で回答してください。

(Q11: Q1につき、あなたが優れている、同程度である、劣っている)

(Q12: Q2につき、あなたが優れている、同程度である、劣っている)

(Q13: Q3につき、あなたが優れている、同程度である、劣っている)

(Q14: Q4につき、あなたが優れている、同程度である、劣っている)

〔質問7〕 Q1、2は、あなたにとって重要な事柄であると思われませんが、そのように自覚するようになった主な理由を、(a, b, c, d, eなど)

(a) 自分がそうであることは自分の理想であるから

(b) 自分がそうであることは社会的価値の1つであり望ましいから

(c) 自分なりの理想の水準や過去の自分と比べて、それをできるようになったから、あるいはまだできていないから(自己観察すること)

(d) 他の人がわたしに直接的・間接的に言ってくれることや、わたしに示す反応を通して自分が優れているからまたは劣っているから(他の人からのフィードバックによって)

(e) 自分の行為や意見を他の人と比べて、自分の方が優れているからまたは劣っているから(他の人との比較によって)

の中から選んで回答してください。回答が複数であってもよろしいです。回答が複数の場合は重要な理由から先に順に答えてください。それ以外の理由のばあいはその主旨を手短かに回答ください。

(Q1につき:)

(Q2につき:)

学籍番号【 】男・女 年 齡【 歳】
 教職年数（92年4月現在）【 年 月】

No. 1

非常に まあまあ ほとんど
 かなり あまり まったく

1. 私はすべての点で自分に満足している。

思 う |-----|-----|-----|-----|-----| 思 わ な い

2. 私はときどき、自分がんでだめだと思う。

思 う |-----|-----|-----|-----|-----| 思 わ な い

3. 私は、自分にはいくつか見どころがあると思う。

思 う |-----|-----|-----|-----|-----| 思 わ な い

4. 私は、たいいていの人かやれる程度には物事ができる。

思 う |-----|-----|-----|-----|-----| 思 わ な い

5. 私は、あまり得意に思うことがない。

思 う |-----|-----|-----|-----|-----| 思 わ な い

6. 私は、ときどき自分が役立たずだと感じる。

思 う |-----|-----|-----|-----|-----| 思 わ な い

7. 私は、自分が少なくとも他の人と同じ地位に立つだけの価値がある人だと思う。

思 う |-----|-----|-----|-----|-----| 思 わ な い

8. 私は、もう少し自分に誇りがもてたならばと思う。

思 う |-----|-----|-----|-----|-----| 思 わ な い

9. 私は、どんなときでも自分を失敗者だと思う。

思 う |-----|-----|-----|-----|-----| 思 わ な い

10. 私は、どんなときでも前向きな態度をとっている。

思 う |-----|-----|-----|-----|-----| 思 わ な い

<資料>

【親密さ評定】

問1 友人(～さん)についてお聞きします。以下のそれぞれの質問文を読み、あなたの今の気持ちにいちばんあてはまる番号を1つ選んで○印をつけて下さい。

全くそのとおりである
かなりそのとおりである
ややそのとおりである
どぎつどぎつとしない
ややそのとおりでない
かなりそのとおりでない
全くそのとおりでない

①親密次元

- A ～さんとは気が合いますか。
～さんは好きだと思いますか。
B ～さんには親しみを感じますか。
～さんには個人的なことで話せますか。
C ～さんの気持ちや考え方がよくわかりますか。
～さんには安心して話せますか。

②交遊次元

- A 誰かと一緒に食事に行くとしたら、～さんと行きたいと思いますか。
誰かと話をするとしたら、～さんとしたいと思いますか。
B 誰かと一緒にハイキングに行くとしたら、～さんと行きたいと思いますか。
誰かと一緒にスポーツをするとしたら、～さんとしたいと思いますか。
C 誰かと一緒に旅行に行くとしたら、～さんと行きたいと思いますか。
誰かと一緒にコンサートに行くとしたら、～さんと行きたいと思いますか。

③愛慕次元

- A ～さんは他の人から憧れられていると思いますか。
～さんは何をすることも気がよいと思いますか。
B ～さんは正直で情熱的だと思いますか。
～さんは話かよいと思いますか。
C ～さんは他の人から憧れられていると思いますか。
～さんには見習いたいところがありますか。

④共同次元

- A 一緒に専門書を読むとしたら、～さんと読みたいと思いますか。
一緒に課題をするとしたら、～さんとやりたいと思いますか。
B 一緒に仕事をするとしたら、～さんとやりたいと思いますか。
一緒に運動場を走るとしたら、～さんとやりたいと思いますか。
C 一緒に作業をするとしたら、～さんとやりたいと思いますか。
一緒に教材研究をするとしたら、～さんとやりたいと思いますか。

⑤競争次元

- A ～さんとは、どちらが早く目標を達成されるか競争したいと思いますか。
～さんとは、お互いに負けたくない部分がありますか。
B ～さんとは、常に良きライバルでいたいと思いますか。
～さんとは、お互いに頼り合う部分を持っていますか。
C ～さんとは、競い合ってお互いを高めたいと思いますか。
～さんがあなたの比較対象となることか、ありますか。

【比較対象としての友人に対する認知評定】

①友人の得点に対する関心度

- A ~さんの点数をどのくらい覚えていますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
 B ~さんの点数がどのくらい気になりましたか。 (7 6 5 4 3 2 1)
 C 次の課題を行うとき、~さんの点数をどのくらい知りたいと思いますか。 (7 6 5 4 3 2 1)

②協同相手としての評定

- A 一緒に教材を作るとしたら、どのくらい~さんと作りたいと思いますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
 B 共同制作をせるとしたら、どのくらい~さんとやりたいと思いますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
 C 一緒に計画を立てるとしたら、どのくらい~さんとやりたいと思いますか。 (7 6 5 4 3 2 1)

③協同競争相手としての評定

- A 二人で研究したものが発表として評価されるとしたら、どのくらい~さんと
 競みたいと思いますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
 B 二人組でこのアナグラム課題をやった後と競争するとしたら、どのくらい
 ~さんと競みたいと思いますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
 C 二人組で迷宮ゲームの競争をせるとしたら、どのくらい~さんと競みたいと
 思いますか。 (7 6 5 4 3 2 1)

④競争相手としての評定

- A 成績を比べるとしたら、どのくらい~さんと比べたいと思いますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
 B このアナグラム課題で競争するとしたら、どのくらい~さんを競争相手として
 選びたいと思いますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
 C 勝ち抜き戦をせるとしたら、どのくらい~さんを競争相手として選びたいと
 思いますか。 (7 6 5 4 3 2 1)

【関連性評定】

問2 あなたは、課題についてどう感じましたか。

①課題に対する興味・関心

- A この課題は、どのくらいおもしろかったですか。 (7 6 5 4 3 2 1)
 この課題をもう一度やってみたいとどのくらい思いますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
 B この課題をやっていてどのくらい楽しかったですか。 (7 6 5 4 3 2 1)
 この課題にどのくらい興味を覚えましたか。 (7 6 5 4 3 2 1)
 C この課題はどのくらいおもしろかったですか。 (7 6 5 4 3 2 1)
 この課題をやりたくない、どのくらい思いますか。 (7 6 5 4 3 2 1)

②課題の妥当性評価

- A この課題によって、思考の柔軟性をどのくらい正確に測ることができると
 思いますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
 この課題は思考の柔軟性のレベルを判断するものとしてどのくらい妥当だと
 思いますか。 (7 6 5 4 3 2 1)

- B この課題は、思考の柔軟性を測るものとしてどのくらい重要だと思いますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
 人間として生きて行くうえで思考の柔軟性がどのくらい大切だと思いますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
- C この課題によって、どのくらい正確に思考の柔軟性のレベルを測ることができると思いますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
 思考の柔軟性が、一般的な知的能力を反映するものとしてどのくらい重要だと思いますか。 (7 6 5 4 3 2 1)

問3 あなたは、課題の結果についてどう思いますか。

③自己のパフォーマンス結果に対する評価

- A 他の人と比べて、あなたのできばえはどのくらい良かったと思いますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
 他の方は、あなたのできばえをどのくらい良かったと判断すると思いますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
- B あなたには、思考の柔軟性がどのくらいあると思いますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
 他の方は、あなたに思考の柔軟性がどのくらいあると判断すると思いますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
- C あなたのできばえは、全体の中でどのくらい良かったと思いますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
 他の方は、あなたのできばえを全体の中でどのくらい良かったと判断すると思いますか。 (7 6 5 4 3 2 1)

④パフォーマンス結果に対する満足度

- A この結果にどのくらい満足感をおぼえますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
 この結果をどのくらい受け入れることができますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
- B この結果をどのくらい許容できますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
 この結果をどのくらい受け入れることができますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
- C この結果にどのくらい満足感をおぼえますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
 この結果にどのくらい許容することができますか。 (7 6 5 4 3 2 1)

問4 あなたは、思考の柔軟性についてどう思いますか。

⑤自己定義にとっての重要性

- A 思考の柔軟性は、あなたにとってどのくらい必要な能力ですか。 (7 6 5 4 3 2 1)
 あなたは、他の人より思考の柔軟性がどのくらいあると思いますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
- B 思考の柔軟性に欠けていることは、どのくらい強会いになりますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
 思考の柔軟性があるということをどのくらい重要視しますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
- C 自分自身について考えると、思考の柔軟性のあることがどのくらい強会いになりますか。 (7 6 5 4 3 2 1)
 思考の柔軟性に欠けているということは、あなたにとってどのくらい強会的なことですか (7 6 5 4 3 2 1)

【比較対象の選択】・【課題選択】

A, B, C共通

問5 この質問は、次に課題を行う時、参考にするものです。今のあなたの気持ちに最もあてはまるものに○印をつけて下さい。

A.これは、同じアナグラム課題を行った人の点数の一部です。

(A (最高得点)、B (よい評価と同程度の得点)、C (悪い評価と同程度の得点)、D (最低得点))
 がモニターを通して表示される。

①協同相手

一緒に課題を行うとしたら、誰とやりたいですか。

(A B C D)

②協同競争相手

二人組で他の組みと競争するとしたら、誰とペアになりたいですか。

(A B C D)

③競争相手

個人で競争するとしたら、誰を競争相手として選びますか。

(A B C D)

B. 次に行うとしたら、下の4つのうちのどの課題を行いたいですか。(注を参考にして1つだけ選んで下さい。)

- A 3文字アナグラム
- B 今回の課題より難易度の高いアナグラム
- C 今回の課題より難易度の低いアナグラム
- D 5文字アナグラム

(A B C D)

- 注: A...これは、思考の柔軟性に優れている人も劣っている人も同じくらいできる(できよできがはっきりしていない)課題です。
B...これは、思考の柔軟性がかなり優れた人なら高得点のとれる(優れた人がはっきりわかる)課題です。
C...これは、思考の柔軟性がかなり劣った人以外の人には難しい(劣った人がはっきりわかる)課題です。
D...これは、思考の柔軟性がかなり優れた人なら高得点がとれ、かなり劣った人には点差のとれない(できよできがはっきりしている)課題です。

おわりに

われわれは、長い職業生活をおくっていく上で、自分自身の興味や関心の広がりや深まりとともに自分の能力適性の問題が重要な位置を占めてくる。青年は自己特性の中で能力をどのように位置づけているだろうか。そのような能力はいかなる契機でもって自分自身の中に気づかれてくるのであろうか。また、未知の能力の獲得過程の中で、能力に対する自己評価が明確となり安定していく段階で、どのような心理的メカニズムが作用するのかが検討された。

得られたデータから多くのことが語られるわけではないが、この領域の研究は重要な意味をもっている。今後、さらに分析を加えることで新しい方向性を見いだしていけるようにしたいと考えている。